

明治学院歴史資料館資料集
第10集①

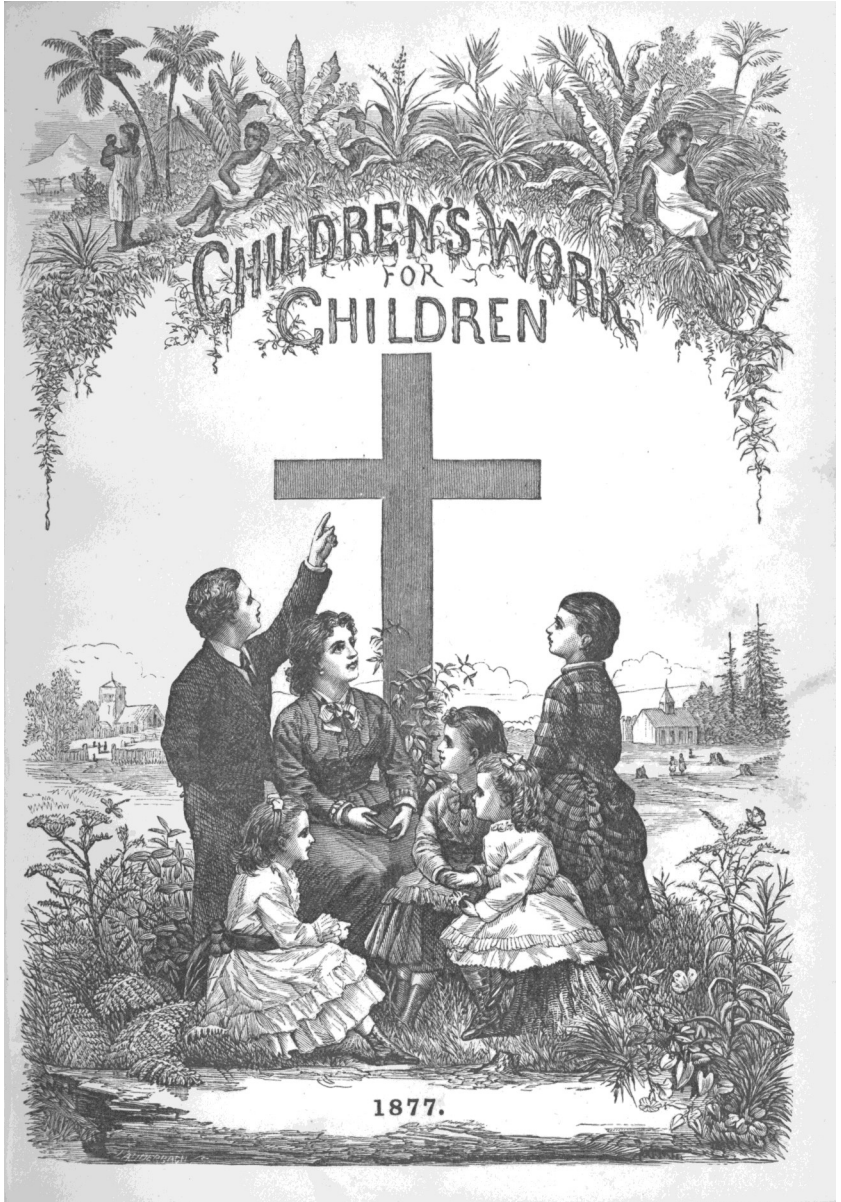
バラ学校を支えた二人の女性
—ミセス・バラとミス・マーシュの書簡—

The Woman's Foreign Missionary Society of the Presbyterian Church
Lydia Ballagh & Belle Marsh



“ Children's Works for Children, 1877 ” より

【Children's Work for Children, 1877】



表紙



CHRISTMAS.

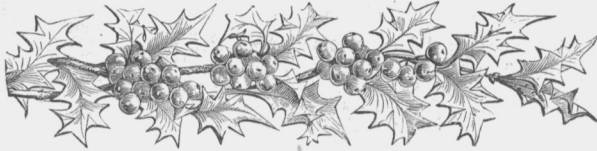
BY SUSAN COOLIDGE.

WHAT does the robin think, the hungry robin,
If he looks in and sees the berries red,
And glossy holly garlands, shine and twinkle,
Down from the old church rafters overhead?
Does he feel grieved and fear to go unfed?

How does the fir tree feel, torn from its forest
To bear its taper-harvest once, and die?
Does its wild heart ache, does it pine to hasten
Back to the woods, the shadowy winter sky,
The frost, the keen cold wind, and liberty?

I think not; Christmas must have some dear meaning
For all God's creatures, be they great or small.
It is the trees that stay behind are saddest;
They watch the ringing axes rise and fall,
And whisper, "We are green, too—we are tall."

児童文学作家スーザン・クーリッジ (Susan Coolidge) による
クリスマスの詩



CHRISTMAS HYMN.

BY REV. PHILLIPS BROOKS.

(Reprinted by permission)

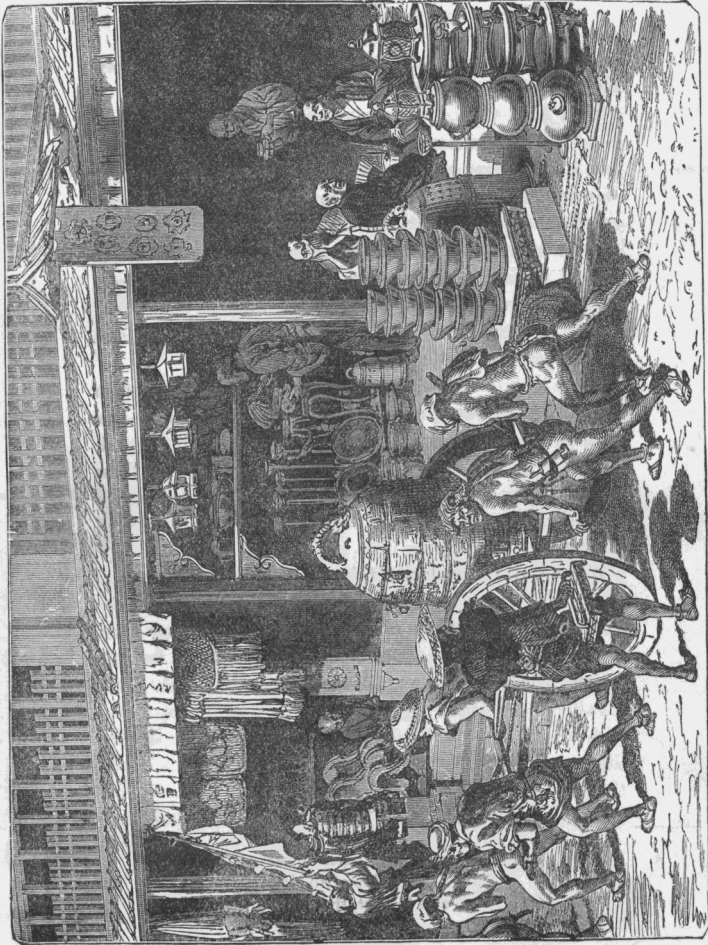
O LITTLE town of Bethlehem !
How still we see thee lie ;
Above thy deep and dreamless sleep
The silent stars go by :
Yet in thy dark streets shineth
The Everlasting Light,
The hopes and fears of all the years
Are met in thee to-night.

For Christ is born of Mary,
And gathered all above,
While mortals sleep, the angels keep
Their watch of wondering love.
O morning stars together
Proclaim the holy birth,
And praises sing to God the King,
And peace to men on earth !

How silently, how silently
The wondrous gift is given ;
So God imparts to human hearts
The blessing of His heaven.
No ear may hear His coming,
But in this world of sin,
Where meek souls will receive Him still,
The dear Christ enters in.

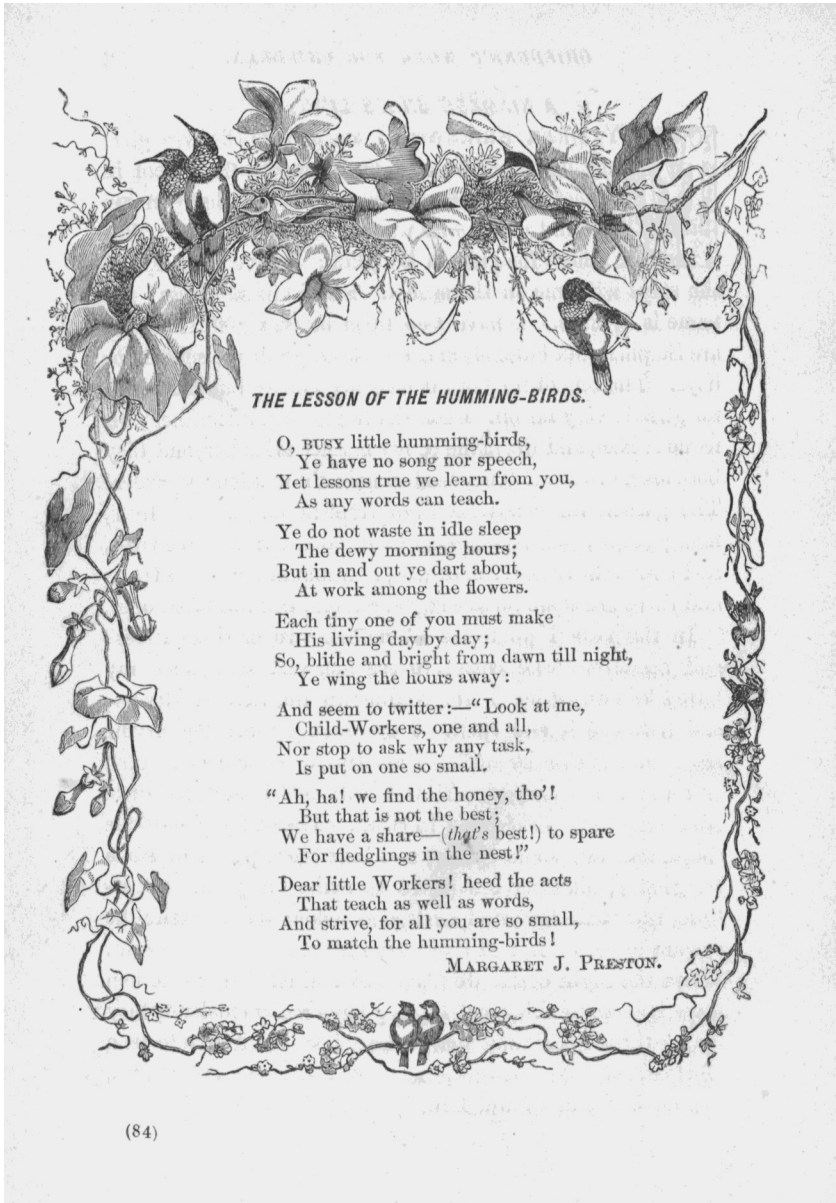
Where children, pure and happy,
Pray to the blessed Child,
Where misery cries out to Thee,
Son of the mother mild .

クリスマスの賛美歌「ああベツレヘムよ」
("O Little Town of Bethlehem")

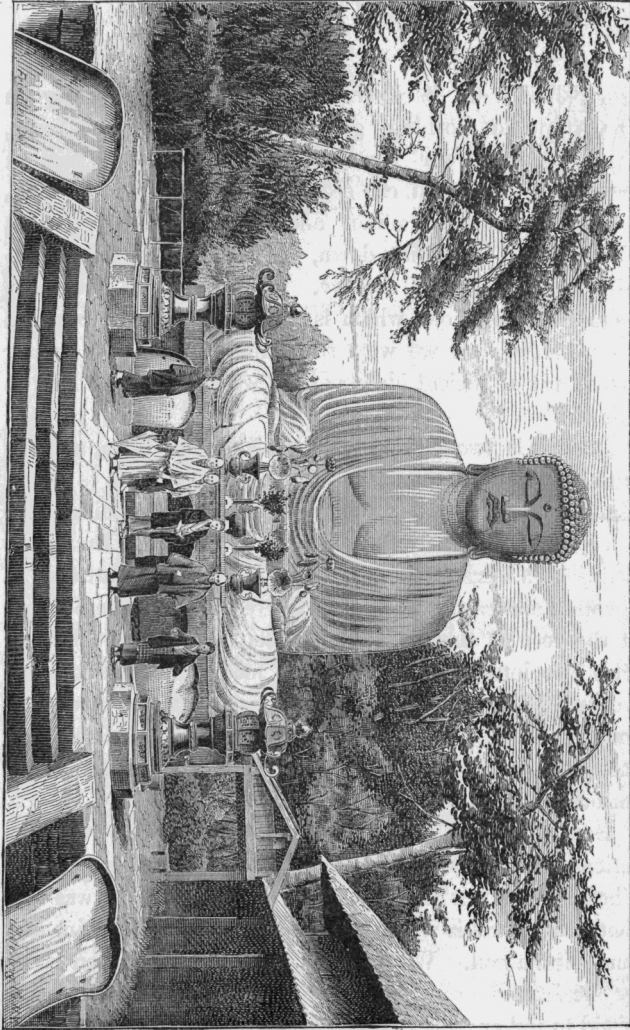


(52)

東京の路上風景



詩人マーガレット・プレストン (Margaret J. Preston) による「ハミングバードから学ぶこと」("The Lesson of the Humming-birds")と題する詩。プレストンの父親は米国長老教会の牧師であった。



鎌倉大仏

向かって右側の建物は、「大仏探訪」(24ページ)で言及のある
ミセス・バラが昼食をとった茶店である。

明治学院歴史資料館資料集

第10集①

バラ学校を支えた二人の女性

—ミセス・バラとミス・マーシュの書簡—

目次

【図版】 *Children's Work for Children, 1877* より

訳者解説（明治学院歴史資料館研究調査員・齋藤元子）・・・4

【第1部】 ミセス・バラの書簡

Children's Work for Children, 1877（翻訳）・・・11

1877年4月	「横浜の少年たち」
1877年5月	「横浜のカドヤ」
1877年6月	「横浜の少女たち」
1877年9月	「日本の人力車」
1877年11月	「日本の家庭」
1877年12月	「大仏探訪」

Children's Work for Children, 1877（オリジナル）・・・27

Woman's Work for Children, 1878-1879（翻訳）・・・43

1878年3月	「近況報告」
1879年9月	「報告書間」
1879年11月	「報告書簡」

Woman's Work for Children, 1878-1879（オリジナル）・・・51

【第2部】 ミス・マーシュの書簡（翻訳）・・・57

1876年10月31日	Yokohama, Japan
1876年11月17日	Yokohama, Japan
1876年11月17日	Yokohama, Japan
1876年12月28日	Gama no, Ni shia ku Ni ju go Ban

訳者注・・・78

訳者解説

明治学院歴史資料館研究調査員 齋藤元子

本書は、ヘボン塾を受け継ぎ、1876(明治9)年1月より横浜居留地39番においてJ. C. バラ (John Craig Ballagh) が運営したバラ学校を支えた二人の女性ミセス・バラ (Lydia Ballagh) とミス・マーシュ (Belle Marsh) の本国アメリカへ宛てた書簡の翻訳である。

明治学院の源流の一つであるバラ学校は、これまでほとんど研究されてこなかったが、書簡には校舎やそこで学んでいた生徒たちの様子、当時の横浜居留地周辺の町並みなどが記されており、バラ学校の実態を垣間見ることができる史料である。

1. ミセス・バラとその書簡

ミセス・バラは、最初の夫を南北戦争で亡くし、未亡人となってから宣教師を志した。1873(明治6)年、超教派の女性組織である米国婦人一致外国伝道協会(The Woman's Union Missionary Society of America for Heathen Land)の派遣により、アメリカン・ミッション・ホーム(横浜共立女学校)の教師となった。1875(明治8)年、J. C. バラと結婚し、長老教会ミッションの所属となる。夫の運営するバラ学校を支えるとともに、ヘボン夫人 (Clara Mary Hepburn) が1874(明治7)年に開始した住吉町小学校 (Sumiyoshi Day School) を受け継ぎ、その責任を負った。また、1878(明治11)年横浜の茶葉加工工場、通称「お茶場」で働く女工の子どもたちの世話をする託児・保育施設「お茶場学校」を開設した。これは日本の近代保育事業の先駆をなすものである。1884(明治17)年、休暇帰国中のアメリカで肺炎を患い急逝する。

本書で訳出した書簡は、米国長老教会女性海外伝道協会(The Woman's Foreign Missionary Society of the Presbyterian Church)

の機関誌 *Woman's Work for Woman* ならびに子ども向け機関誌 *Children's Work for Children* に 1877 年から 1879 年に掲載されたミセス・バラによる日本からの報告書簡である。

19 世紀後半のアメリカに展開された女性海外伝道運動は、プロテスタント教会の女性教会員が組織した女性海外伝道協会により、アジア・アフリカなどの異教地に女性宣教師を派遣する運動であった。この運動は、多くのアメリカ人女性に支持され、各教派が競うように女性宣教師を海外に送り出した。

各教派の女性海外伝道協会が多数の会員を得ることができた要因の一つとして、運動の広報としての役割を担った機関誌の存在をあげることができる。各教派の女性海外伝道協会は、協会設立後、早期に機関誌の発行に着手した。海外の異教地で活動する女性宣教師からの報告書簡の掲載を通して、伝道活動の現状のみならず、異教地の地理・歴史や文化をもアメリカ国内の会員に知らしめることが、運動の永続性と成功をもたらすとの確信による行動であった。

機関誌には、子ども向けのページも設けられていた。これは、将来の宣教師を育成するという目的のほかに、協会の資金源として、子どもたちからの小額の献金にも期待する意図があったからである。子ども向けのページは、やがて独立した機関誌へと発展した。

米国長老教会女性海外伝道協会は 1870 年に結成された。翌年の 1871 年に機関誌 *Woman's Work for Woman* が創刊され、1876 年には子ども向けのページが独立して *Children's Work for Children* が誕生した。

ミセス・バラは宣教師夫人であったとともに、米国長老教会女性海外伝道協会所属の女性宣教師でもあった⁽¹⁾。ミセス・バラの報告書簡は、その多くが子ども向け機関誌 *Children's Work for Children* に掲載されている。

- (1) *Seventh Annual Report of the Woman's Foreign Missionary Society of the Presbyterian Church, Philadelphia, 1877, p. 37.*

2. ミス・マーシュとその書簡

ミス・マーシュは、1876(明治9)年10月米国長老教会女性海外伝道協会派遣の女性宣教師として横浜に着任した。居留地39番においてバラ夫妻とともに生活し、バラ学校と住吉町小学校で教鞭をとり、伝道活動にも従事した。1879(明治12)年、バプテスト教会の在日宣教師ポート(Thomas Pratt Poate)と結婚し、バプテスト教会に転籍する。その後、宣教師夫人として、仙台、盛岡など東北地方の開拓伝道に力を尽くし、1892(明治25)年に帰国した。

本書で訳出した書簡は、ミス・マーシュが来日間もない時期に居留地39番からアメリカの家族、親類に宛てたものである。ミセス・バラの書簡が機関誌の掲載を念頭において書かれたものであったのに対して、ミス・マーシュの書簡は完全に私的であり、女性宣教師としての使命感と同時に、戸惑いや不安、バラ夫妻に対する感情などが素直に吐露されている。

書簡のオリジナルは、米国マサチューセッツ州の Arthur and Elizabeth Schlesinger Library on the History of Women in America に現在所蔵されている。1992年、ミス・マーシュの孫である Richard Poate Stebbins 氏により、ポート宣教師夫妻の日本からの手紙が *The Japan Experience—The Missionary Letters of Belle Marsh Poate and Thomas Pratt Poate, 1876-1892* と題する書簡集として刊行され、ミス・マーシュ時代の横浜からの手紙も収められている。

<参考文献>

- 安部純子『ヨコハマの女性宣教師 ―メアリー・P・ブラインと「グランドママの手紙」―』EXP, 2000.
- 齋藤元子「*Children's Work For Children* ―米国長老教会女性海外伝道協会発行子ども向け機関誌―」明治学院大学キリスト教研究所紀要 41, pp. 53～82, 2008.
- 中島耕二・辻直人・大西晴樹『長老・改革教会来日宣教師事典』新教出版社, 2003.
- 日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館, 1988.
- 明治学院百五十年史編集委員会編『明治学院百五十年史』明治学院, 2013.
- 鷺山弟三郎『明治学院五十年史』明治学院, 1927.
- Stebbins, Richard Poate, *The Japan Experience—The Missionary Letters of Belle Marsh Poate and Thomas Pratt Poate, 1876–1892*, Peter Lang, 1992.

第1部

ミセス・バラの書簡

第1部 ミセス・バラの書簡

Children's Work for Children, 1877
(翻訳)

1877年4月	「横浜の少年たち」
1877年5月	「横浜のカドヤ」
1877年6月	「横浜の少女たち」
1877年9月	「日本の人力車」
1877年11月	「日本の家庭」
1877年12月	「大仏探訪」

Children's Work for Children

Vol. II -4, pp. 54-56

April 1877

Some Boys of Yokohama

Mrs. J. C. Ballagh

横浜の少年たち

ミセス J.C. バラ

親愛なる *Children's Work for Children* の読者の皆さんに遠く離れた日本からご挨拶の言葉を送りたい。アメリカから数ヵ月を要して、素晴らしい雑誌 *Children's Work for Children* が我が家に届けられた。嬉しい限りである。今日、雑誌のページをめくりながら、目を輝かせて *Children's Work for Children* を読んでいる幸せなアメリカの子どもたちとおしゃべりがしたいという気持ちで私の心はいっぱいになった。というのは、私は以前にアメリカの読者の皆さんにお願いごとをしたが、それに応えてくれたことへのお礼をぜひ言いたかったのだ。

だが、まず初めに、我が家の敷地内にある学校について、ぜひとも紹介をさせていただきたい。我が家では脇のドアを出入りする時、左側に並んだ 6 つの小部屋の前を通る。この小部屋は小さなガラス窓と紙製のドアがあり、夫ミスター・バラが運営する学校の寄宿生たちが使用している。彼らは 17 歳から 19 歳の大変見栄えの良い生徒たちである。同じ敷地にある長い建物は、ドクター・ヘボンの診療所で、こちらも普段は男子のための学校として使われており、ドクター・ヘボンは土曜日のみ使用している。

毎土曜日、ドクター・ヘボンの診察を受けるために、早朝から多くの人が集まってくる。時には、ありとあらゆる病を抱えた 200 を超える人々が押し寄せることもある。患者の中には小さな乳幼児もおり、表情は皆痛々しく、冬の冷たい風や夏のうだるような

暑さと直射日光に曝されている姿を目にすると非常に心が痛む。ある子どもは顔や手に大きな傷を負っており、またある子どもは手足を骨折している。優秀な医師であるドクター・ヘボンは、人々に病の中でも最も危険なものは罪という病であると説く。そして、彼は主イエス・キリストについて話す。もし、人々が主を信じ、病の快復を主に願うならば、叶えてくれるであろうと語るのである。同時に、ドクター・ヘボンは、一人一人の患者を優しく診察し、目を治療し、骨折した手足を固定し、真に必要な飲み薬や軟膏を与える。ドクター・ヘボンにとって一つの大きな試練が存在する。それは日本の親たちが病気の子どもをどのように世話したらよいかを知らないことに由来する。彼はそれぞれの親に丁寧に指導をしているにもかかわらず、親から適切な世話を受けないがために、依然多くの子どもたちが失明したり、手足の自由を失ったり、命を落としている。読者の中には、重い病気を経験した人もいるだろう。その時、愛する両親や友達に君の病を治すため、全力を尽くしてくれたはずである。

今日は土曜日ではないので、ドクター・ヘボンの診察はなく、学校が開かれている。そこで学校を訪ねることとしよう。生徒たちの肌の色は我々よりも浅黒く、風変わりな衣服を身に着けているが、実に精悍で幸せそうな表情をしているではないか。彼らは皆小柄な少年で、列に並べられた低い座席と机を使って勉強している。最初の二人は兄弟で、一人は「トクタロー」ともう一人は「コバヤシ」と呼ばれている。彼らの父親は商人で、富裕層に属する。従って、彼らは日本の家庭に見いだせる便利な生活用品のすべてを所有している。しかし、次はアメリカ人の家庭でコックとして働いている人物の息子である。この日本人男性は、英語の読本を生徒たちのために日本語に翻訳している。また、彼は日本語の読み書きを毎日午後二時から教えている。だが、生徒たちはより容易に英語が書けるようになっている。英語は日本語に比べてはるかに書きやすい。

15 歳になる聡明な少年は、若い大名（プリンス）である。他の

生徒たちと異なる服装や立ち振る舞いをしているわけではないが、日に日に威厳が増してきている。彼がアルファベットを学び始めてから16ヵ月がたったが、今彼は、第四リーダーを読み、地理と文法と算数を英語で学んでいる。また、彼はかなり上手に作文が書けるようになった。休み時間になると、彼は意欲的に色々な遊びに加わっている。生徒たちは、アメリカの少年同様に、ボール投げ、凧揚げ、雪合戦、鬼ごっこが好きである。また、彼らは、アメリカでは知られていないゲームやたくさんのパズルを持っている。一つの点において、彼らは世界中の子どもたちのお手本である。それは彼らが例外なく他人に対して親切であり、決して喧嘩をしないことである。彼らは幼少のころから礼儀正しく両親や教師に対して従順であると教えられてきている。たとえ、嘘をつくように強いられたとしても、従わなければならない。

ふっくらとした丸顔の青年は「オータ」¹という名前で、我々が設立した日本人教会の牧師補佐である。彼はたくさんのことを学ぶために真面目に勉強しなければならない状況にあるが、ユーモアに富んでおり、たいへん誠実で、若いにもかかわらず、非常に信頼のおける人物である。彼の傍らには、もう一人のクリスチャンがいる。その人物は、「ツル」²という名前で、今年の夏、我々と一緒に日光を訪れ、60人から100人の前で何回も説教をした。もちろん、最初に何を説教するか指示を受けているが、彼は英語をよく理解しているので、最も優れた通訳者である。平安に満ちた表情をしているのが「カドヤ」という人物である。彼の信仰が本物であるか厳正に審査がなされたが、そのことについては後日話そう。

他に2名の聡明なクリスチャンの少年が在籍している。その一方で、昨年在籍し洗礼を受けた3名の少年が帰郷した。彼らは故郷でキリスト教の教えを広めることを約束していった。また、今月1名がここ横浜で商売を始めるために本校を去る。現在、在校生のうち3名が洗礼を受けることを希望している。寄宿生は朝の勉強と共に、毎晩1時間の聖書の学びがある。

Children's Work for Children

Vol. II -5, p. 71

May 1877

Kadoya of Yokohama

横浜のカドヤ

無記名³

カドヤ⁴は受洗後、安息日に働くことを拒んだため、最初は叩かれた。そして、ついには、「安息日を守ること」という十戒の四番目の掟を守ろうとするならば、「父母を敬うこと」という五番目の掟を破らざるを得ないという困難に直面した。そこでカドヤはミスター・ルーミスを訪ね、助言を求めた。カドヤは、四番目の掟に従うことが彼の義務であるならば、叩かれても構わない心積もりであった。ミスター・ルーミスは、カドヤのおじの前でカドヤの主張を弁護した。すると、おじはカドヤが休息と礼拝の日として安息日を守ることに首肯した。ところが、しばらくすると、親戚の人たちがカドヤにクリスチャンであることをやめるよう強要し始め、もし信仰を捨てないのであれば、勘当すると脅した。彼らは、幼い頃から愛情を注いできたにもかかわらず、何と恩知らずであるかとカドヤをなじった。この言葉は繊細なカドヤの心を深く傷つけた。長いこと、親戚の怒りに怯える日々を送っていたが、少しずつ怒りの程度が収まってくると、カドヤが彼らに向かって「あなた方が喜ぶのならば、私はどんなことにでも従いましょう。ただし、たとえ私の身体が粉のように砕かれたとしても、信仰を捨てることはできません」と述べた。すると、彼らは金品やおべっかを使ってカドヤの母親や祖父の力を借りようと試みた。そして、ついにはカドヤを黙らせた。この時期、カドヤは我々に次のような手紙をよこしている。「ダニエルをライオンから救い出した神は必ずや自分のことも救い出すであろう」と。カドヤを襲

ったこの騒動の最終段階は、母親と祖父という 2 頭のライオンからの烈しい攻撃であった。しかし、カドヤの心は常に喜びに満ち溢れ、それは彼の表情にも表れていた。「私の身体は大きな苦痛を蒙っているが、魂は喜びでいっぱいである。なぜなら、主が私と共におられるからである」と綴っている。今現在は、嬉しいことに、カドヤに医学教育を施し、その間の支援も行いたいというドクター・ヘボンからの申し出に対して、カドヤの母も祖父も同意をしてくれた。よって、カドヤは無慈悲なおじから解放され、学生用の居室で心地よい時間を満喫している。

Children's Work for Children

Vol. II -6, pp. 86-87

June 1877

Some Girls of Yokohama

Mrs. J. C. Ballagh

横浜の少女たち

ミセス J. C. バラ

女学校と少年のための学校とは小さな竹垣で隔てられている。女学校は小さな日本家屋で、少年のための学校よりもかなり小さい。どちらの学校の壁面にも、アメリカの友人から贈られた可愛い絵が飾られている。これらの絵は、そこに描かれている真実を少年少女たちが理解するのに大いに役立っている。願わくは、絵を進呈してくれた親切な友らにそのことを知らせたい。さらに、これらの絵は、学校の少年少女たちばかりでなく、土曜日に診察を待つ病気の男女や子どもたちの退屈な待合室の慰めでもある。彼らは絵を眺め、それによって彼らにも教えが伝授される。主イエス・キリストが幼い子どもたちを祝福している美しい絵を目にすることは、私たちが発するいかなる言葉を耳にするよりも、はるかに強く彼らに真実を訴えかける。

ここでは、数人の少年が待の用いるパンツを特別な日に身につけることを除いては、少女と少年は同じような服装をしている。したがって、すぐには男女を識別することは難しい。加えて、彼らは同じような名前を持っている。読者の皆さんは、ミス・マーシュ (Marsh) と彼女の教え子の少女たちが英語あるいは日本語で賛美歌「主我を愛す」を歌うのを聞いたならば、嬉しさを覚えるに違いない。彼女たちは、皆さんが歌っているのと同じ賛美歌をたくさん知っており、とてもかわいらしく歌う。少年たちも賛美歌を歌う機会は同じようにあるが、彼らの声質ゆえに、少女たち

ほど上手ではない。ミスター・バラは今、少年たちに音符を用いて歌を教えており、優れた低音担当のシンガーの誕生が期待されている。少女たちはミス・マーシュが大好きで、ミス・マーシュは彼女たちの教育に全身全霊を捧げている。新しい生徒を見分けるのはさほど困難なことではない。なぜなら、ここにしばらくいる生徒たちの表情は、彼女たちが習得した明るさと知性の発露により、大きく変化しているからである。彼女たちが朗読や暗唱をするのを聞くのは喜びである。英語という外国語を上手にはっきりと言葉にしていることに感動するばかりではなく、彼女たちの日本語なまりの残る発音もまた愛嬌を感じさせる。毎週水曜日は、通常の聖書の学び、賛美歌、祈りの後に、*Peep of Day*⁵の一章を読み、残りの一日は裁縫に費やす。

もし、読者の皆さんが興味をお持ちならば、日曜学校と日本の家庭を訪問した時のことを次回お話したい。

皆さんが日本の年少女たちのために祈りをささげてくださることは想像に難くないが、さらに熱心に祈ることをお願いするのをお許しいただきたい。なぜならば、彼らがクリスチャンになるのを支援してくれるような友人は、彼らの身内にはまったく存在しないからである。それどころか、もし彼らが受洗したならば、冷笑され、村八分にされるに違いない。しかしながら、彼らが主イエス・キリストを救い主として受け入れないならば、私たちが今彼らのためにしていることのすべてが、彼らに対する非難を大きくするばかりである。

Children's Work for Children

Vol. II -9, pp. 132-135

September 1877

The Jinrikisha of Japan

By Mrs. J. C. Ballagh

日本の人力車

ミセス J. C. バラ

掲載の挿絵をみると、人力車 (*jinrikisha*) はどのようなものであるかかなり正確なイメージがつかめると思う。もちろん読者の皆さんは、小柄な 2 人が乗っている挿絵のような人力車に乗るのは楽しいと思うであろう。時には、一台の人力車に 3 人、4 人、そして 5 人もの人が乗り合わせ、社交場のようにになっているのを見かける。人力車では、馬がおびえたり暴走したりするのを恐れる必要がない。しかし、これにかなり類似したことは起こる。数日前、ある人力車は町中の坂を下っている時、クーリーが踵をしっかりと地面につけなかったためか、あるいは、体を十分に後ろにそらせなかったために、今にもうつ伏せにバツタリと倒れそうで、その上に人力車が覆いかぶさるのではないかというほどの危険なスピードに達していた。恐れをなしたクーリーは、半ば自暴自棄になって、道路の脇まで走り出すことで人力車を止めようとした。それをしたために、人力車は小さな日本の家屋の中に突っ込み、紙で作られている戸や窓を粉々にし、乗客の女性は放り出されて怪我を負い、感覚が麻痺してしまった。我々は幸いにもそのような経験はまだしていない。今年の夏、人力車で 90 マイルの旅をしたが、1 回だけ軽い災難に会っただけであった。そのような旅をする場合、4~5 マイルごとに、飲み物を取るために止まる。また、喫煙や食事のためは、少なくとも 1 日 8 回は休憩する。ある場所では、かじ棒が少し上がった状態で、クーリーがそれを抑

えていない時に、我々は人力車の乗り込もうとした。すると、頭を地面に打ちそうになるほど、後ろに反りかえってしまったが、怪我はなかった。クーリーの中には、日本の馬を追い越し、すぐに視界から遠ざけてしまうほどのスピードを身につけている者もいる。

背の高い堂々とした紳士や淑女が、「大人サイズの車輪を持つ乳母車」に乗っているのは滑稽に見えるが、彼らが籠(*kago*)に体を丸めて乗り込む姿は、もっと滑稽である。籠とは、本誌の1876年11月号で説明をしたもの⁶である。この籠という乗り物は、道が狭く人力車が通れないところを除いて、ほとんど使用されなくなっている。籠は、山道でも、岩道でも、溪谷の間でも行くことができる。曲がりくねった山道や断崖の上を走っている時、担ぎ手の男たちの足元がしっかりしているかどうか確かめずにはいられない。ある日、背が高くがっちりとした体形の男性であるミスターB…が、籠を肩に乗せて持ち上げようとしたが、一步も進まないうちに、落してしまった。彼が言うには、肩が砕けそうな感じだったそうである。それほど重いものであるにもかかわらず、担ぎ手は10分毎に、担ぎ棒を乗せる肩を代えるために止まるものの、数マイルも早足で進む。担ぐ肩を代える時は、器用にかがみこみ、もう一方の肩で荷を負って立ち上がる。その間、担ぎ棒は手に持っていた杖が支えとなっている。彼らはおしゃべりをしながらも、どんな質問にも直ちに答えてくれ、道端に咲いている美しい花を摘むために止まってくれる。我々と同行した2人の少女は籠の乗車を心から楽しんだ。彼女たちは向かい合って座り、おしゃべりをしたり、好きな遊びをしていた。

私は人力車の男たちをクーリーと呼んできたが、中には下層階級ではない人もいて、彼らは日々の糧を得るためにこのような召使的な労働に集まるほど零落したのである。少なからぬサムライ(*samurai* 古い規範における日本の上流階級)が、人力車の担ぎ手や外国人の使用人の中に見出せると聞いている。人力車と籠の私の初体験は、非常に苦痛であり、同じ人間を労役用の動物の如

く用いていると思えてきて、悲惨であった。私は最初に日本に足を踏み入れた時、私の旅仲間が乳母車に乗り込み、小柄なクーリーによって素早く運ばれていくのを見て、筆舌に尽くしがたい可笑しさを覚えた。しかし、私の番が来た時、それは決して滑稽なことではなくなった。籠が多少重く感じるようになると、クーリーは「ハイ フイダ ホ (*hai fuida ho*)」と吠える習慣があることを私は知らなかったので、坂を登り始めた時、私の恐怖心は同情心と同じほどになった。私は貧しい人間が苦しみがいてほしい、クーリーがそのうち倒れて、きっとその場で死んでしまうのではないかとハラハラし通しであった。なぜ止めてほしいと彼に言わなかったのか不思議に思うだろうが、私にはどうすることもできなかった。英語は彼にとって意味を成さないものであり、私は日本語を使うことができなかった。

もし、彼らがクーリーとして生きていかなければならないのならば、労役用の動物のような死に方をしないように祈ってほしい。彼らには祈りや助けを必要としているあわれな妻や子どもたちがいる。どうか、皆さんの誰かがここに来て、彼らのために祈ると共に、働いてほしい。今、皆さんは祈りと献金によって彼らを大いに支えることができる。そして、皆さんが成長し、仕事に就く時期が来たならば、神が皆さんのうちの誰かを私たちのもとに遣わしてくれることを祈っている。「多くの者の救いとなった人々はとこしえに星と輝く」⁷という聖書の言葉を思い出してほしい。

Children's Work for Children

Vol. II -11, pp. 174-176

November 1877

A Japanese Family

日本の家庭

無記名⁸

掲載の絵は、一人の日本人の商店主が、妻と娘と一緒に、夕飯を始めようとしているところである。彼らの姿勢は、我々から見ると、非常に疲れるものであるが、彼らにとっては慣れたもので、大いにこの姿勢を好んでいる。トルコ人のスタイルとは異なるが、足を曲げて体の下に入れ、その結果、体は両足の裏の部分に載る形となる。

母親の前にある箱のような家具の一品は、暖房炉である。その上にはいつも沸騰したやかんが置かれている。日本人は一日を通して頻繁に茶を飲み、客人には常に一杯の茶をふるまう。クリームを入れたピッチャーや砂糖の入ったボールがないのに気づいたのであろう。なぜならば、日本人はクリームや砂糖を持ち合わせていないからである。彼らは透き通った状態で茶を飲む。茶にクリームや砂糖を加えることにより、我々西欧人は茶の味を損ねていると、日本人は考えている。

挿絵の家族が使用しているテーブルは、非常に小さくて、低いものである。もし彼らの暮らし向きがもっとよかったならば、たぶん、同じような小さいテーブルを家族一人一人のために用いているであろう。しかし、彼らはたくさんの食器を持っていないので、一つのテーブルがすべての目的にかなっているのである。彼らの夕食はおそらく非常に簡素で、米飯に芋、そして数種類の野菜か魚がたぶん添えられている。日本にもアメリカにある野菜や果物の多くが存在する。そして、魚が豊富である。なぜならば、

すでに知っているとは思いますが、日本は周囲を海に囲まれているからである。

挿絵の男性も女性も扇を持っている。というのは、すべての日本人が暑い季節には扇を携帯しているからである。彼らは非常に寛いで見える。そして、あたかも真面目に食事に取りかかろうとしているかのようである。ただし、我々にとっては、そのように小さなテーブルを囲んで床に座ることは、遊びのように思えるのだが……。そして、それはまた喜ばしい光景でもある。なぜならば、異教の国々においては、日本のように家族が集まって一緒に食事することは、非常に稀だからである。インドでは、妻や娘は主人が食べ終わるまで待たなければならず、彼女たちの食事は男たちが食べ残した物である。

Children's Work for Children

Vol. II -12, pp. 190-191

December 1877

A Visit to Daibutz

By Mrs. J. C. Ballagh

大仏探訪

ミセス J. C. バラ

私たちは、早朝にここ横浜から人力車 (*jinrikishas*) に乗り、鎌倉を訪れた。昼食は茶店でとった (その一部は挿絵⁹の右側に描かれている)。帰りは別のルートを通って、7 時に帰宅した。鎌倉へ向かう途中、美しく自然に富んだ景色の中を通過した。鎌倉の町には、700 年の歴史を持つ中国の寺があり、多くの参詣者を集めている。しかし、私たちは古くからの偶像崇拜の対象であるより巨大な遺物を見ることを切望していたので、その寺院には長く滞在はしなかった。

大仏は町の中心部から 2、3 マイル離れたところにある。焼けつくような太陽光線を遮る木陰すらなく、大仏は野晒しの状態で置かれている。この偶像は、銅で作られており、44 フィートの高さがある。通常、仏陀は蓮の花の上に座しており、両手は握られていて、専心と休息の態度を示している。その神の足もとにある小さな香が焚かれている祭壇は、銅製の台ならびに同じ金属と技術を用いて作られた蓮の花瓶から成っている。両側に立つ提灯は、12 から 14 フィートの高さがあり、同じく銅製で、芸術の素晴らしい見本である。これらは大名 (*daimios*) から寄進されたもので、非常に高額なものである。

仏陀はいつも同じような姿をしている。例外として、若い頃や神になる以前の姿を表現したものも少しはあるけれども。その頃は、まだ彼の額には印がなかった。聞いたところによると、その

額の印は、偉大な魂が彼の中に入り込んだ場所であり、それが彼を神となさしめたということである。我々はあまりにししばしば日本人から一人一人まったく異なる説明を聞かされるので、単なるうわさ話を今紹介しているのではないかという恐れすら感じている。

我々は台座をよじ登り、7人一度に仏像の親指の上に座った。大仏の外観をじっくりと見物して好奇心を満たしたのちは、大仏の内部に入ることもできる。我々は踊り場まで階段を上り、仏像の背中にある窓から素晴らしい景色を眺め、内部では、鼻の部分にある祭壇を見物した。大仏の上部は遥か頭上にあるので、そこまで登ることはできず、見上げることができるのみである。日本人は梯子段を使って、大仏の土台の部分に降りる。そこには静かな小礼拝堂があり、その祭壇は大仏の銅製の衣の襷の隙間を通して差し込む太陽の光が注いでいる。

もし我々がこの素晴らしい一点の芸術品を建立するのに費やされたすべての労役と犠牲を知ることができたならば、それは何たる歴史に残る話であろうか！ 仏像を建立するのに必要なお金を乞うためにあちこちを旅して巡った僧侶や尼僧たちは、そのような行いをすることにより、偉大な仏陀の機嫌を取っていると考え、そうすることで天国に行くことが保証されると思っていた。また、彼らにお金を与えるために自分の欲望を我慢している人々も同様に天国が保証されていると考えていた。しかしながら、それは全く空虚なことであった。というのは、誰一人として、そのような行為によって、より幸福になったり、暮らし向きが良くなったりした人はいないからである。

帰路は別の道を通ったが、絶え間なく絶景を楽しんだ。ある場所は、「天国の平原」という名称を授かるほど美しく、広大な見晴らしを誇っている。人力車 (*jinrikisha*) の男性は、町ごとに休憩をとったり、水を飲んだり、たばこを吸うために立ち止まらなければならなかった。ある町では、盛大な祭日、つまり、祭り (*matsuri*) が催されていた。大勢の人々が晴れ着を身につけていた。群衆が

取り囲んでいる寺院の庭では、力士が踵の上に体重を乗せ、土¹⁰をお互いに向かって投げる動作をまさに始めようとしていた。合図と同時に、力士は互いに飛びかかった。試合は両者がぐるぐる回っていて、ほとんど互角であった。我々は決着がつくまでは見ていなかった。もし、若い友人であるあなた方の誰かが我々を訪ねてきてくれたならば、大仏までの人力車の旅をきっと楽しむだろうと確信している。

第1部 ミセス・バラの書簡

Children's Work for Children, 1877
(オリジナル)

April 1877	Some Boys of Yokohama
May 1877	Kadoya of Yokohama
June 1877	Some Girls of Yokohama
September 1877	The Jinrikisha of Japan
November 1877	A Japanese Family
December 1877	A Visit to Daibutz



VOL. II.

APRIL, 1877.

No. 4.

SOME BOYS OF YOKOHAMA.

MRS. J. C. BALLAGH.

CREETING from the far-off shores of Japan to all the dear readers of *Children's Work for Children!*

For several months past your beautiful magazine has found its way to our home, where it is most welcome. To-day, as I was looking over its pages, my heart was filled with a desire to talk with the many bright-eyed, happy children who peruse it, for I have some requests to make, as well as thanks to offer for some favors received. But first allow me to introduce you to our schools, which are in our yard. As we go out of our side-door, we pass six little rooms at our left, with a tiny glass window and paper doors. These are occupied by Mr. Ballagh's boarding pupils—fine-looking students, from seventeen to nineteen years of age. That long building is Dr. Hepburn's dispensary; and it is also used for the boys' school, the Doctor using it only on Saturdays. On those days people begin to assemble at early dawn—sometimes over two hundred, with all manner of

diseases. It would make your heart ache to see some of the poor babies and little children who are brought there, with such dreadful-looking eyes, with nothing to shield them from the cold or storm in winter, or the broiling heat and glaring light of the sun in summer. Some of them have faces and hands that are one mass of sores, while others have broken limbs. The good Doctor preaches to them about the most dangerous of all their diseases—sin; then tells them about Jesus, who will cure them if they will believe on Him and ask Him to do so. He also tenderly examines each one, operates on their eyes, sets and binds up the broken limbs, and gives medicines or ointments as they severally need. One thing is a great trial to him. Parents here do not know how to care for their sick children, so although the Doctor is very particular in telling them how, yet many a poor child goes blind all his days, others lame, and still others into an early grave, because they are not properly cared for. Some of you know how hard it is to be sick, with loving parents and friends to do everything possible to relieve you.

But to-day is not Saturday, so we will visit the school. Are they not a nice and happy-looking set of pupils, despite their dark faces and strange dress? There are all the smaller boys in that tier of low seats and desks. The two in the first are brothers, named Tokutaro; those in the second also, called Kobyyashé. The fathers are merchants of the better class, so they have all the comforts found in Japanese homes. But the next is the son of a cook in an American family. That Japanese man is translating their English reading lesson into Japanese for them. He also teaches them to read and write their own language every day after two o'clock. But they learn to write English with greater facility, it being so much easier than Japanese.

That bright-looking boy of fifteen is a young *daimio*

(prince). There is nothing in dress or manner to distinguish him from the others, but he does show royalty in his progress. Sixteen months since he learned the alphabet; now he reads in the Fourth Reader, and studies geography, grammar, and arithmetic in the English language. He also writes very good compositions. At recess he enters into all their sports with great zest. They enjoy balls, kites, snowballing, and blind-man's buff, as well as boys at home. They have also some games that are very good, which are unknown to you, and many puzzles. In one respect they are models for the children of all nations, namely, they are universally kind to each other, and *never quarrel*. They are taught to be very polite from infancy, and obedient to parents and teachers. They *must* be polite, even if compelled to tell lies to do so.

That full, round-faced young man is Ota, the deacon of our native church. He has to study hard for all he learns; but while he has a large fund of humor, he has also great integrity of character, and is very reliable for one so young. There is another Christian near him, Tsuru, who went with us to Nikko last summer, and preached many times to from sixty to a hundred people. Of course he was first instructed what to preach, and understanding English so well, is a most excellent interpreter. That one with face beaming with peace is Kadoya, whose faith has been so severely tested, and of whom we will tell you hereafter.

There are two other bright Christian boys still here, while three who were in school and baptized last year have gone to their homes where we trust they are exerting a Christian influence, and one left this month to go into business in this city. Three of those now here have expressed a wish to be baptized. Those who board here have an hour of Bible study every evening, as well as the morning lesson.

KADOYA OF YOKOHAMA.

ADOYA was beaten at first because he refused to work on the Sabbath, after he was baptized. Finally he became troubled lest he was breaking the Fifth Commandment in trying to keep the Fourth, so he came to Mr. Loomis for counsel. He was willing to take the beatings if it was his duty to observe the Fourth Commandment when his uncle commanded him to work. Mr. L. pleaded his cause before his uncle, who then consented to let him observe the Sabbath as a day of rest and worship. After a little while, however, his relatives began to urge him to give up Christianity, and threatened to cast him off if he did not. They taunted him with base ingratitude, for all the care they had bestowed on him from childhood. This gave great pain to his sensitive nature. He was in constant fear of their anger for a long time, but when threatened by them in their maddest rage, he told them that "he would do anything that was *right* to obey and please them but he could not deny Christ if they ground his body to powder." Then they tried bribes and flattery, got his mother and grandfather to use their power also. Finally they shut him up. During this time he wrote us that "He who delivered Daniel from the lions, would surely deliver him." During the last of this excitement he had two severe attacks of illness. But his heart was always joyous, which was reflected in his face. He said, "Though my body has great torment, my soul is full of joy, for Jesus is with me." Now, I am glad to tell you that both his mother and grandfather have consented to have him accept Dr. Hepburn's proposal to give him a medical education, and his support meantime, so he is free from his cruel uncle, and occupies the pleasantest of the students' rooms.

SOME GIRLS OF YOKOHAMA.

MRS. J. C. BALLAGH.



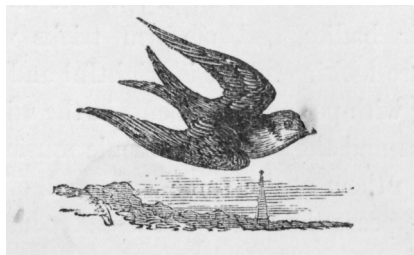
LIGHT bamboo separates the girls' school from the boys'. It is a neat Japanese house, and much smaller than the other. Those pretty pictures on the walls were sent by friends at home, as were those in the boys' school also. I wish the kind donors knew how much they help these little ones to understand the truths they illustrate. And not these only, but they convey a lesson to the sick men, women, and little ones, who look at them to beguile the tedious waiting-time for their turn to be examined on Saturdays. One look at the beautiful picture of "Jesus Blessing Little Children" makes the truth more real than any words of ours could do.

Here you see the girls dressed like the boys, unless some of the boys have on their *sumurai* pants for special occasions. I think you would scarcely be able to tell boys and girls apart for a while. They have the same names also. You would be delighted to hear Miss Marsh and her girls sing "Jesus loves me," either in English or Japanese. They sing many of the same hymns that you do, and very sweetly too. The boys sing as much, but not so well, for their voices are not as good. Mr. Ballagh is now teaching them to sing by note, and hopes that some will make good bass singers. You would see how much they love their teacher, and that she is all devotion to them. It will not trouble you either to know which ones are new scholars, for the faces of those who have been here for a time become so

changed by the bright, intelligent expression they acquire. You would rejoice to hear them read and recite, for they not only do so very well and distinctly for those using a foreign tongue, but the Japanese brogue which clings to them sounds quite amusing. On Wednesdays, after the usual Bible lesson, singing and prayer, they read a chapter of "Peep of Day," and then devote the rest of the day to needlework.

If you would like, I will tell you about the Sabbath-school, and visits in Japanese homes, at another time.

I doubt not that you do pray for our boys and girls; but permit me to ask you to pray very earnestly, for they have no friends in their homes to help them become Christians. On the contrary, they are laughed at and persecuted if they do. Yet if they do not accept Jesus as their Saviour, all we are doing for them makes their condemnation greater.

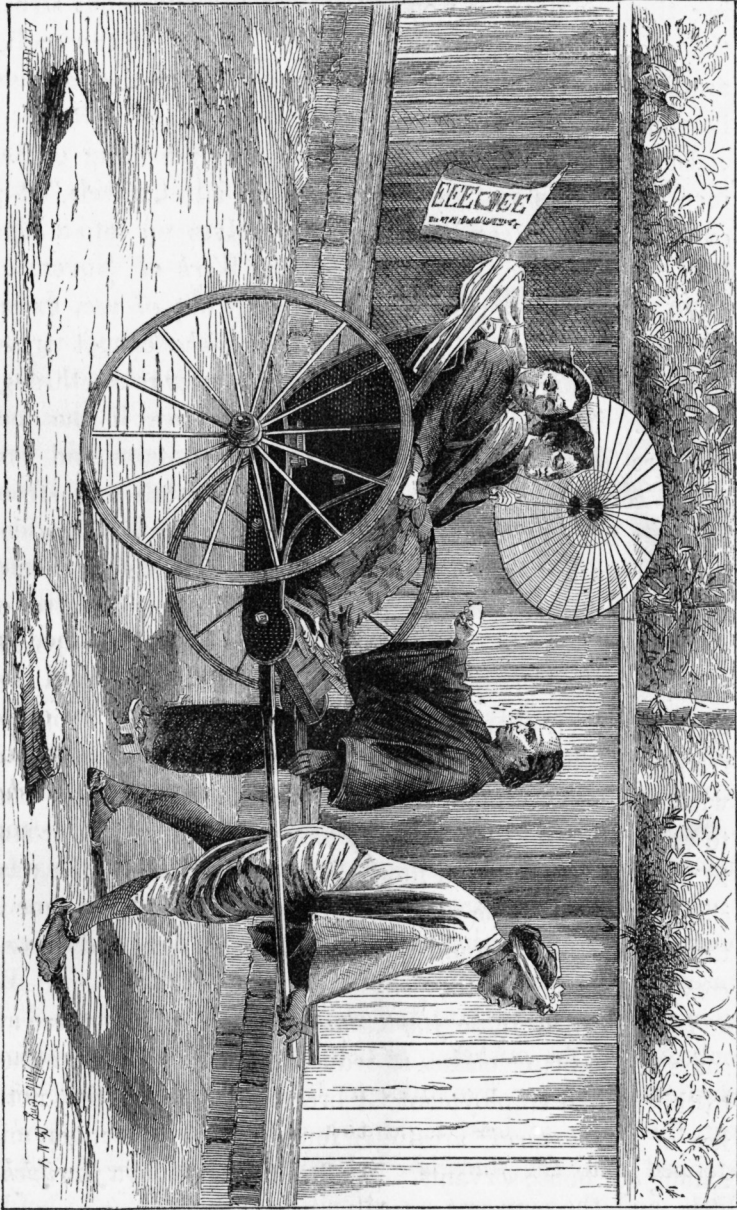


THE JINRIKISHA OF JAPAN.

MRS. J. C. BALLAGH.



YOU can gain from this picture a very correct idea of the appearance of a *jinrikisha*. Doubtless you would think it delightful to take a ride in one, as the little ones do here. Sometimes we see three, four and five in one *jinrikisha*, having a social time as well as a ride. You would not be afraid of your horses getting frightened and running away with you. Yet something does happen quite similar to that. A few days since, in coming down one of the hills in town, the coolie did not plant his heels quite firmly or brace himself backward quite strongly enough, so he began to go at such speed as to put him in danger of falling flat on his face, and the *jinrikisha* over him. In his fright he made a desperate effort to stop by running out by the side of the road, and in so doing he ran into a small Japanese house, smashing its paper doors or windows, and throwing out the lady passenger bruised and insensible. We have been spared any such experience. In going ninety miles into the country last summer, we had only one slight mishap. When taking such journeys they stop every four or five miles to drink, if not to smoke and eat, the latter at least eight times a day. At one place I stepped into the *jinrikisha* when the thills were raised a little, and the man was not attending to his duties in hold-



ing them, so over we went backward till our heads struck the ground, but no harm was done. Some of the coolies acquire such speed that they will pass some of the Japanese horses, and leave them out of sight.

Ludicrous as it is to see tall and stately-looking gentlemen and ladies in "baby-carriages on adult wheels," it is even more so to see them curl themselves up into a *kago*, like the one described in *Children's Work* of November, 1876. These latter vehicles are nearly out of use, except where the roads are such that a *jinnrikisha* cannot travel them. The *kago* takes you up mountains, over rocks, through ravines. You cannot help watching to see if the men are sure-footed, when winding around mountains and over precipices. One day Mr. B——, who is a tall and strong looking man, raised one end of my *kago* to his shoulder, but dropped it before taking one step. He said it seemed to him that it was crushing his shoulder; yet they trot on for miles, stopping every ten minutes to change the pole to the other shoulder. To do this they put the staff they carry in their hands under the one on their shoulder, resting it there while they deftly stoop down and rise up with the other shoulder under the burden. They chat to each other, and are ready to answer any question, or stop to pluck some beautiful flower for you growing by the wayside. The two little girls of our party had a lovely time in their *kago*. They could sit erect, face to face, and have a cosy chat or play as they chose.

I have called these *jinnrikisha* men coolies, but there are some of the better classes so reduced, that they have resorted to this menial employment for bread. I am told that not a few of the *samurai** are to be found among these men and among our house servants. My first rides both in a *jinnrikisha*

* A high class of Japanese under the old rule.

and *kago* were very painful, so dreadful was the thought of using a fellow-being as a beast of burden.

When I first set foot on the shore of Japan, it was indescribably funny to me to see my travelling companion step into a baby carriage, and be whirled away by a little coolie. But when my turn came, it was anything but ludicrous. When we began to ascend a hill, my fears equalled my sympathy, not knowing the habit coolies then had of howling "*hai huida ho,*" &c., whenever their load became somewhat burdensome. I thought the poor creature was in agony, and feared every moment he would drop down and perhaps die on the spot. You may wonder that I did not tell him to stop, but how could I? The English language would be wasted upon him, and I could not use the Japanese.

Will you not pray that these men may not die like beasts of burden, if as such they must live? Surely they have little enough of comfort and joy in this life, to say nothing of the life beyond. Some of them have poor wives and children also to be prayed and labored for. Will not some of you come here to labor as well as pray for them? You can help much by your prayers and pennies now, then when you are grown and ready for life work, we pray the dear Lord to send some of you to help us. Remember that "They that turn many to righteousness shall shine as the stars for ever and ever."

A JAPANESE FAMILY.

HERE we have a Japanese shopkeeper, with his wife and daughter, ready for their dinner. Their position would be a very fatiguing one for us, but they are accustomed to it, and like it very much.

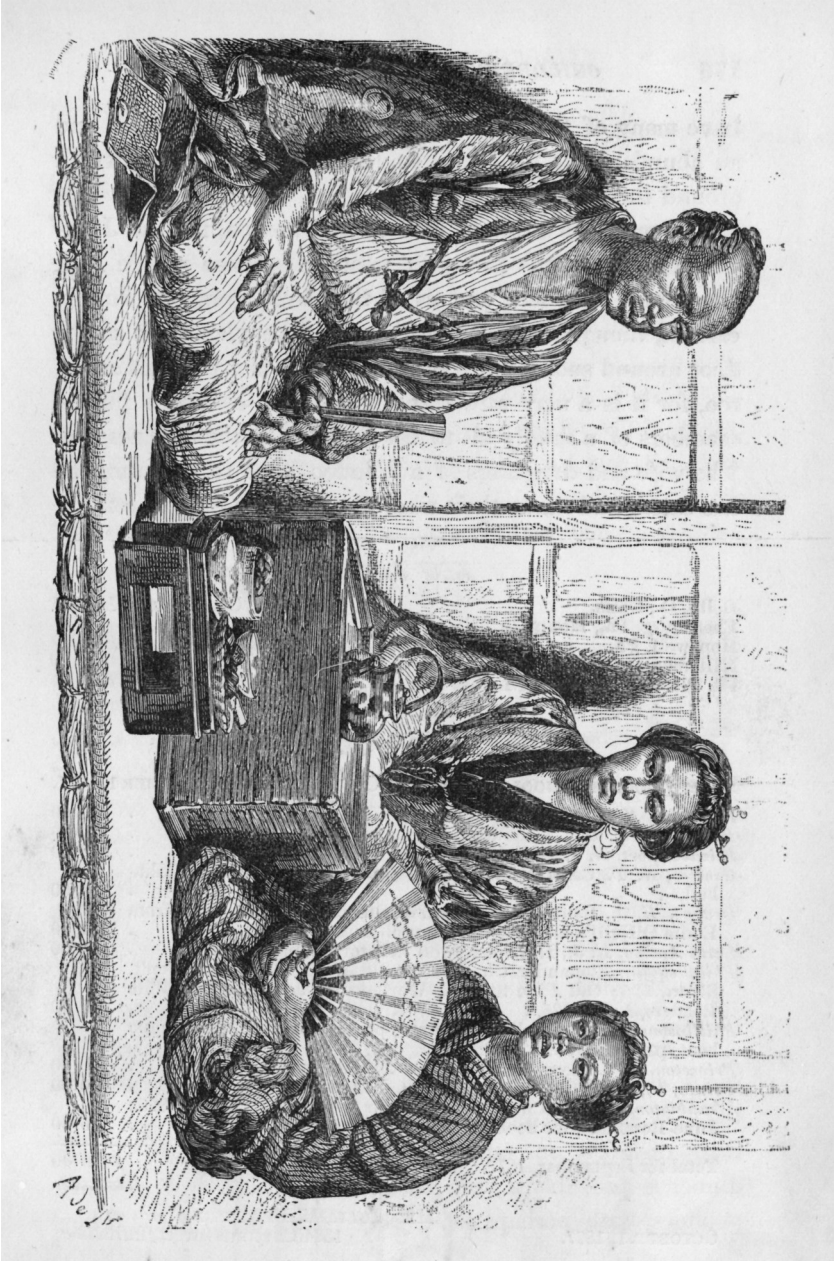
It is not the Turkish style, but their limbs are bent under them so that the body rests on the back part of the feet.

The box-like article of furniture in front of the mother is a furnace, upon which a tea-kettle is kept always hot. They drink tea often through the day, and always present a cup of it to a visitor. You see no cream-pitcher or sugar-bowl, for they have none, but drink their tea clear, and think that we spoil ours by putting into it cream and sugar.

Their table is a very small and low one. If they were in better circumstances, they would probably have such a little table for each member of the family, but they do not have many dishes, so one table answers the purpose for all. Their dinner is probably a very simple one, consisting of rice and potatoes, with perhaps some other vegetable, or fish. They

have many of the vegetables and fruits which we have, and an abundance of fish, for you know that there is water all around their country.

The man has a fan, as well as the women, for the Japanese all carry fans in warm weather. These people look very much at home, and as if they were going to dine in earnest, though it would seem to us like play to sit on the floor around such a little table. And it is a pleasant scene, too, for it is a very rare thing in heathen countries for the members of a family all to eat together as the Japanese do. The wife and daughters of a Hindoo have to wait until he has eaten, and make their meal on whatever may be left.



A VISIT TO DAIBUTZ.

BY MRS. J. C. BALLAGH.



WE take *jinrikshas* here at Yokohama early in the morning, go to Kamakura by one route, have our lunch at the tea-house (a part of which you can see at the right of the picture), return by another route, and reach home by seven o'clock, P.M. In going down, we pass through some beautiful and much wild scenery. In the town is a Chinese temple 700 years old, which is the resort of many pilgrims for worship; but we were so anxious to see the greater monument of ancient idolatry, that we did not tarry long at this one.

Daibutz is two or three miles beyond the town, and sits with bare head, without the shelter of even a tree to shield him from the scorching rays of the sun. The idol is made of bronze, and is forty-four feet high. As usual, Buddha is sitting on a lotus flower, his hands clasped in an attitude of devotion and rest. The altar, where a little incense burns at the foot of the divinity, consists of a table of bronze, with two lotus vases of the same metal, and of admirable workmanship. Those lanterns on each side are twelve or fourteen feet high, and are also of bronze, and fine specimens of art. These are given by *daimios*, as very meretricious acts, and cost large sums of money.

Buddha always looks the same, except in a few representations of him when young, and before he became a god. Then he had not that mark on the forehead. I was told that that place is where the great spirit entered him and made him a god. We so often have the explanation given by one Japanese contradicted by another, that we feel almost afraid to tell anything from hearsay.

We climbed up, and seven of us sat on his thumbs at one time. After gratifying your curiosity in scrutinizing the exterior, you can go inside. We ascended a flight of stairs to a platform, and looked out of a window in his back upon a fine landscape, and within, at a shrine in his nose. It is so far above you, that you can see only the upper part. The Japanese descend by a staircase into the foundation of Daibutz, where they find a quiet oratory, the altar of which receives a ray of the sun through an opening in the folds of the god's bronze mantle.

If we could know all the toil and sacrifice it cost to erect this wonderful piece of art, what a history it would be! The priests and nuns who travelled about to beg the necessary money to erect it, thought that they were propitiating the great Buddha by so doing, and would gain heaven by it, as also thought those who denied themselves to give the money; but it was all in vain, for no one is made happier or better by it.

On returning home by a different way, we were continually feasting upon magnificent scenery. One place is so beautiful, and commands such an extensive view, as to receive the name of "Plains of Heaven." *Jinriksha* men must needs stop at every town for rest, water and a smoke. At one town they were having a great feast day or *matsuri*. Crowds of people were seen in gala dresses. In the temple grounds, surrounded by a dense crowd of people, were wrestlers just beginning operations by sitting on their heels and throwing dirt at each other. At a signal they sprang at each other, and the contest was so nearly equal that they rolled over and over. We did not wait to see the final result. If any of our young friends will pay us a visit, we feel quite certain that they will enjoy a ride to Daibutz, or Dai Butsee.

第1部 ミセス・バラの書簡

Woman's Work for Woman, 1878-1879
(翻訳)

1878年3月	「近況報告」
1879年9月	「報告書間」
1879年11月	「報告書簡」

Woman's Work for Woman

Vol. VIII-3, pp. 70-71

March 1878

Recent Missionary News

Mrs. Ballagh, Yokohama, Japan

近況報告

ミセス J. C. バラ

この 4 ヶ月は、多くの心配事や苦労が私たちの上に重くのしかかり、力強い助けがなかったならば、おそらくは心身ともに喪失していたであろう。毎日 5、6 時間の授業をし、来訪する宣教師たちをもてなし、その間に、地震と台風でずたずたになった 7 つの建物を日本人の職人と一緒に元に戻すのは、決して容易な作業ではない。私たち（ミスター・バラ、ミス・マーシュ、そして私）がこのように健康でいられるのは驚くべきことであり、友らによる私たちのためへの祈りが聞き入れられたと実感するばかりである。私たちの生徒の数は日々の出席者が 100 名を超え、日曜学校と礼拝参加者は以前よりはるかに多くなっている。ミス・マーシュは週一回祈禱会を開催している。私も週一回とその他に月に一度はある女性の自宅でも祈禱会を催している。この女性は「私はたくさん罪を犯してきたが、今は救いのよき証を得ている」と話している。彼女は友人や隣人を招いているが、その中にはかなり高齢の男性も数人おり、周囲からやや敬遠された場所に座り、おそらく一度も賛美歌集会などには招かれたことがない様子である。出席している人たちの社会生活について言えば、上流階級の女性たちは詩作や綺麗な刺繍細工をする以外ほとんどすることがない。その下の階級の女性たちは一家の世話、縫い物、礼儀正しく子どもをしつけることを担っている。三番目の階級の女性たちは家事一切をしなければならない。そして、四番目の階級の女性たちは

家族を支えるためにお金を稼がなくてはならない。

私たちの生徒である少年の一人が四番目の階級の女性たちについてこんなことを言っていた。「彼女たちは文明人のようである。というのは、彼女たちは夫に口答えもすれば、夫と口論もする」と。日本人は熱気にあふれた議論を口げんかと呼んでいるが、四番目の階級をのぞくと、日本人の女性は誰一人として夫の命令に対して反抗的な言葉を発する者はいない。普段、家族は一緒に食事をするかもしれないが、夫に来客があった際は、妻と娘は接客をしなければならない。だが、女性を虐待するような風習の多くは過去のものとなっていると言えるのは実に喜ばしい。今や、妻や娘を売り飛ばすことは法律で禁じられており、高位の役人は夫人を伴って私たちを訪問している。女学校が国中に増加している。皇后による師範学校は 300 人の生徒を擁しているが、ミッションスクールが女性の地位を高める先頭に立ち、他の国と同様、聖書こそがこの活動の第一の道具である。

Woman's Work for Woman

Vol. IX-9, p. 292

September 1879

Abroad

Yokohama

報告書簡

ミセス・バラは、夫の運営する男子寄宿学校の支援を続ける傍ら、横浜の浮浪児と呼びうるような子どもたちの間で興味深い活動を遂行している。この子らは、母親が茶焙じ場で働いている間、幼い妹や弟を背負い、路上で一日を過ごしている子どもたちである。ミセス・バラからの最近の手紙を紹介しよう。

ミセス J. C. バラ

私たちの「貧民学校」について一言添えなければならない。それは、休日を除いて、9 ヶ月間中断なしに継続している。子どもたちは、決して望ましい環境下ではないにもかかわらず、私が期待していたよりもはるかに成長を遂げている。私たちは茶焙じ場が集中する近くに家を持ちたいと希望している。そうすれば、たくさん子どもたちを教育することができる。私はこの活動を続けるために募金を集めるつもりである。なぜならば、伝道本部に活動資金を求めることは私には考えられないからである。と言うのは、この活動は、他の活動とは異なり、多くの成果を期待できないからである。私たちの計画は、100 人ほどの子どもたちを収容できる場所を確保し、日曜日には母親たちも招いて聖書の学びの時を持つというものである。これは壮大な計画であり、神が使用者と使用人双方の心を大いに動かさない限り、まったくの失敗に終わるだろう。どうか、見捨てられた階層であ

るこの多くの人々のために、熱い祈りをささげてほしい。3,000人以上が茶焙じ場で働いている。

Woman's Work for Woman

Vol. IX-11, p. 371

November 1879

Abroad

Mrs. Ballagh, Yokohama, Japan

報告書簡

ミセス J. C. バラ

ミセス・ヘボンの日曜学校はとても盛んで、ミセス・ウィン¹の日曜学校も同様である。ミセス・ウインは週一回女性のための祈禱会を催し、もし、私たちの学校の生徒の一人を教師として採用できたならば、彼女は平日の学校も始めるつもりでいる。実現は間近であろうが、仏教の僧侶による妨害は甚だしく、ミセス・ヘボンの学校に多くの生徒が集まっていることが彼らの嫉妬心をかき立てているのである。ミセス・ヘボンの学校は、当初は汚くむさ苦しかったが、今は整っている。愛嬌ある表情の高齢女性が、ここにおけるミセス・ヘボンの活動の最初の実りとして、信仰者となった。私たちの少年らは数カ月間毎日曜日に二つの大きな集会を持っている。一つは横浜のかなり東の方面で、もう一つは西側である。彼らはすべて自力で会場を見つけ、賃料を支払い、聴衆を集めた。学校が終了する前の数週間は、60名から100名もの人々が集まった。私はいつも水曜日と木曜日にこれらの会場に行っていた。行けるところまで人力車を使って行った最後の日、女性や少女たちを待っている間、私のヘルパーは一軒の家に入って行き、『イエス・キリストの生涯』の中に描かれている絵を見せた。住人と会話を交わし、彼らのために賛美歌を歌って辞そうとすると、「もっと！」と訴える住人の要求のまなざしが彼女を捕らえた。オヨシさん²は次の日曜日にまた歌ってあげると約束した。

礼拝が催される寺院に到着するや、複数の異なる偶像が飾られ

た大きな堂の前方に着席し、私たちは真の神を崇め、賛美した。これらの寺院が私たちの栄えある救い主を礼拝する場所に変わってくれたらと何度望んだことだろう。私たちはいくつかの寺院で祈禱会を催してきたが、この寺院は今回が初めてで、「昔の話」を聞こうとする多くの聴衆が集まった。常時多くの人が入り出ていたが、最初から最後まで熱心に聞き入っていた人も少なくなかった。帰路、もし私たちに十分な時間と体力があったならば、立ち止まって伝道できそうな多くの集団を見かけた。ある場所では、時間はわずか数分であったが、20名の熱心な聴衆を得た。しかしながら、聖霊が彼らの心に火を点すまでは、彼らの空ろな、あるいは当惑の表情があるのみである。日本の全土に聖霊が力強く注ぎ込まれますように！ ミセス・ウィンは、5月と6月に国内を旅した際、知識階級の間では「新しい教義」または「キリスト教」について耳にしたことがない人はほんの僅かであるという事実に接し、心を打たれた。彼らの大多数はキリスト教をより深く知ることができて喜んでいて。

第1部 ミセス・バラの書簡

Woman's Work for Woman, 1878-1879
(オリジナル)

March 1878	Recent Missionary News
September 1879	Abroad
November 1879	Abroad

Woman's Work for Woman.



VOL. VIII.

MARCH, 1878.

No. 3.

Abroad.

RECENT MISSIONARY NEWS.

MRS. BALLAGH, YOKOHAMA, JAPAN.

“THE last four months have been full of cares and labors pressing so heavily upon us, that had we not been upheld by a strong arm, flesh and spirit both must have failed. Seven buildings to be put in order, after being shaken to pieces by earthquakes and typhoons, is no small task with Japanese workmen, in addition to teaching five or six hours a day, entertaining missionaries who may be passing through, and attending to all our other duties. It is a marvel that we (Mr. Ballagh, Miss Marsh and I) are in such per-

fect health, and we can but feel that the prayers of our friends are thus answered in our behalf. Our pupils number more than a hundred in daily attendance, and our Sunday-school and church congregations are larger than ever before. Miss Marsh has one weekly prayer-meeting and I another; also a monthly one at the house of the woman who said she had "plenty of sin," but who has given good evidence of being saved. She calls her friends and neighbors in, and among them are several aged men, who sit at a respectful distance, and who may never hear any other gospel invitation. . . . As to the social life of these people, the women of the higher class do nothing but make poetry or handsome embroidery, and very little of that; the next class look after the household, sew and teach the children to be polite; the third class do all the housework, and the fourth must earn money for the family support

"One of our boys says of this last class: 'They are like civilization, for they answer back and quarrel with their husbands.' They call an animated discussion *quarrelling*, and no woman in Japan, except from the lowest class, would ever dare utter a word of protest against her husband's command. The family may and do eat together, except when the husband has guests, when the wife and daughters serve them. I am happy to say, that many of the customs which have been so cruel to women are passing away. There is a law now prohibiting the sale of wives and daughters, and high *yakunims* have visited us accompanied by their wives. Girls' schools are multiplying all over the land. The Empress's normal school numbers three hundred pupils; but the mission schools have taken the lead in elevating the women of Japan, the Bible being the chief instrument in the work, as with every other nation."

Woman's Work for Woman.



VOL. IX.

SEPTEMBER, 1879.

No. 9.

Mrs. Ballagh, while continuing to assist her husband in the boys' boarding school, has carried on an interesting work among what may be called the street Arabs of Yokohama, the children who, while their mothers are at work in the "tea firing houses," spend their days in the street with their baby brother or sister strapped upon their backs. In a late letter she says:

"I must add a word about our 'ragged school.' It has continued without interruption (except the holidays) for nine months. The children have made better progress than I dared to expect under the circumstances, and we hope to get a house near the great centre of tea firing houses, so that a larger number may be instructed. I am going to try to get money here to carry it on, for I could not think of asking a Board burdened with debt for it, as it is not a work which promises so much fruit as most others. Our plan is to have accommodation for a hundred children, and try to get the mothers on Sunday to teach them the Bible also. It is a great undertaking, and unless the Lord move the hearts of both employers and employed greatly, it will be an utter failure. Please give your most earnest prayers for this large and neglected class. Not less than three thousand persons are engaged in these tea houses."

MRS. J. C. BALLAGH, YOKOHAMA, JAPAN.

Mrs. Hepburn's Sabbath-school is flourishing, also Mrs. Winn's. Mrs. W. has a weekly prayer-meeting with the women, and is about starting a day school also, if she can get one of our pupils to teach it. The harvest is sure to come, though it is greatly hindered by the priests, whose jealousy was aroused by the large numbers flocking to her school. Mrs. H.'s school is a fine-looking one now, though so dirty and squalid at first. A sweet-faced old lady has become a believer as the first fruits of her work there. Our boys have had two large meetings every Sunday for months, one in the extreme east and the other in the western part of the city. They found the places, paid the rent, and collected the audiences entirely themselves. From sixty to a hundred were in attendance for some weeks before the close of school. I went to these places on Wednesdays and Thursdays. The last day there, I went as far as I could with a *jiriksha*, and while waiting for the women and girls, my helper went into a house and showed them pictures in the "Life of Christ," and after talking and singing to them, left them with hungry eyes that asked for more, which O Yoshi San promised to give them on the following Sunday.

Having arrived at the temple where the service was to be, and seated ourselves in front of a large shrine containing several different idols, we worshipped and sang praises to the true God. How often I have wished that these temples might be converted into places of worship to our glorious Redeemer! We have had prayer-meetings before in temples, but never before this one had we a crowd of listeners to the "old, old story." They were coming and going all the time, yet not a few remained through the whole service, attentive listeners. On our return we saw many groups where we could stop and teach if time and strength were sufficient. At one place, in a few minutes, we had twenty earnest hearers. But until the Holy Spirit enlightens their minds, there is either a blank or a puzzled expression on their faces. Oh, we want a mighty outpouring of God's Spirit all over Japan. Mrs. Winn, while taking a trip in the country during May and June, was struck with the fact that among the intelligent class there are few who have not heard of the "new doctrine," or "Jesus religion." Most were glad to know more of its teachings.

第2部

ミス・マーシュの書簡 (翻訳)

1876年10月31日	Yokohama, Japan
1876年11月17日	Yokohama, Japan
1876年11月17日	Yokohama, Japan
1876年12月28日	Gama no, Ni shia ku Ni ju go Ban

Yokohama, Japan

October 31th, 1876

故郷の皆さんへ

苦痛な旅を終えて、ついに目的地に到着した。無事に上陸できて感謝、今一度、感謝である。この地こそ、私が多くのことを求められている地である。

他の宣教師たちは中国の活動地へと向かった。彼らはここに一泊し、翌日昼間の出航を私は見送った。船は港の沖合い 1 マイルほどのところに停泊しており、岸からは小型の木造平底船サンパンで渡る。このサンパンはほぼ裸で叫び声を上げている労働者クレーンによって操縦されている。私は最初、決して陸にはたどり着けないだろうと思ったが、それにもかかわらず、サンパンがどんな風に翌週に備えて整備されるのかを見たいがために、私は再び乗船する冒険を敢行した。中国へ向かう宣教師たちとの別れは、祖国を離れる時のような心境だった。私たち宣教師一同は、病気や危難の時、お互いに親近感を高めていったからである。親愛なるミス・アンドリューの優しさと忍耐強さは、実の母に勝るとも劣らないものであった。私の心は、彼らのさらなる長い旅の間中、彼らとともにある。恐ろしい船旅による神経的な不安から、私は彼らを引き止めたい気持ちでいっぱいだった。前夜に風の音を耳にし、私の心は深く沈んだ。主が彼らとともにあり、安全に彼らが目的地に至りますように。

無事港に到着した時、私たちは暴風雨に遭遇していたことを知らされた。もし、あと数度船が傾いていたならば、私たちは海に沈んでいたに違いない。「私に賜ったもろもろの恵みについて、どうして主に報いることができようか」¹³。あなたに前回手紙を書いた翌日、もう一艘の汽船と出会った。それはすぐに視界に入り、航路に加わった。ミス・ケッチャムは封筒の上に「私が興奮して思いを馳せること……それは陸地が視界に入ること」と記していた

が。この渡航機会を得られたことは、なんとありがたいことか。なぜなら、もう 1 ヶ月待たされたならば、さぞかしあなたは心配したであろうから。

私はまだ旅の影響から回復しきっていない。1、2 回学校へ行っ
ては見たが、まだ働けるほどではない。できるだけ早く働き始め
たいのだが。というのは、ミセス・ヘボンが体調が悪く、私を切実
に求めているからである。彼女は昨日東京へ行った。私も同行し、
ミス・ヤングマン¹⁴の学校を見学するつもりであったが、気分が思
わしくなく、あきらめた。今日もしばらくの間、起きていられる
のみである。直ちに元気になるのが無理なことは承知しているが、
かなり我慢がならない気分である。しなければならないことがた
くさんあり、もっと早く来るべきであったと思わされる。

金曜日、11 月 2 日。時間があれば、少しでも手紙を書こうと思
う。一度に考えられるよりも多くのことを話すはずである。私は
ほぼ午前中いっぱいミセス・バラと一緒に外出し、非常に疲れた。
私が十分に丈夫でないと思われてしまうのではないかと不安で、
すべきこと以上のことをしている。

私たちは、たしか「人力車 (Ginrickis)」というものに乗し、5
セントで市内のどこへでも行くことができる。これは安価なもの
の一つである。私は、故郷では 25 セントもあれば十分に買える偽
物の貝の櫛に 1 ドル 40 セントも支払った。船中で破損してしまい、
買わざるを得なかったのである。

特に宣教師たちは、故郷のライフスタイルを維持しようとして
いるので、生活費がかさむ。彼らはそれが必要なことであるとい
う。私が自己流にやることを誰も期待していない。私の部屋には
世話係の男性が一人いる。私たちは食卓において自分たちで取り
分けたり、好き勝手に食べたりしてはならない。三人の少女が常
に給仕として控えている。それは決して心地よいものではないが、
慣れていかなければならない。

家具に関しては、用意したものを私が気に入るか皆が気にかけ
ていることがわかった。ミスター・バラは、今日の午前中に 13 ド

ルのランプを私のために選んでくれた。それはたしかに美しいものではあったが、8.5ドルのランプで十分であると私は主張した。まだ家具に多くを費やすことはできない。明日、男性が一人やってきて、私のためにきれいなカーペットを作り、敷いてくれる。男たちはその作業をここで行う。

ミスター・バラの調理人は、小柄な変わり者の見本のような人物である。彼は執拗に私に話しかけ、何を言っているのかを私が理解できないからと心の底から笑う。まだあなたに話していなかったが、私はミスター・ジョン・C・バラ宅に寄宿している。彼は少年部で教えている。ドクター・ヘボンが学校からかなり離れたところに住んでいる。学校はこの「バラ邸」の敷地内にある。私の部屋は非常に快適である。

学校については、子どもたちにいづれ詳しく書きましょう。昨日私は頑張りすぎて、学校にいる間、頭痛や背中痛みを忘れてしまうほどであった。私は自分自身を理解してもらいたい気持ちでいっぱいである。そうすれば、ここにいる愛らしい少女たちに、通訳を介さずに、話しかけることができる。

今日はミカドの誕生日で祝日である。日本人の店は終日閉まっている。外国人の店は昼に閉店する。今、思いついたのだが、一つお願いがある。次の手紙に同封して、ウィリーが使っているマガジンラックの型紙を小布に写して送っていただけないだろうか？ 少女たちのために手芸品がほしいのである。もし、他に何か良いアイデアがあれば、ぜひ教えてほしい。毛糸細工はとても人気があり、わたしはそれをお互いのクリスマスの贈り物として彼女たちに作らせたいと思っている。どうか、忘れずにお願いしたい。なぜなら、手紙はそう頻繁には来ないからである。

11月9日。今は夜の10時過ぎで、もう就寝しなければならないが、明日蒸気船が出航するので、今夜もう少し綴っておかなければならない。前回手紙を書いてから一週間経ったが、すべての瞬間が手一杯の感じである。ミセス・グリーンが活動の休止を余儀なくされ、皆は私が日本の教会のために祈り、尽力することがで

きるのか非常に不安を抱いている。そのため、私は寸暇を惜しんで活動し、私の上達に皆かなり驚いている。そこには、他のすべてのことと同様に、主の助けがあると私は強く信じる。

私は朝食後に学校へ赴き、9時まで少女たちと歌う。学校にはオルガンがあり、少女たちはそれを嬉しく思っている。今週は学校でずっと一人であった。日本人教師は病気で、今では彼がいないほうがやりやすい感じである。英語がわかる少女はわずか二人だけで、しかもあまり上手ではない。私はパントマイムを交えて、懸命に理解してもらおうと努力している。

私は日本語のフレーズをいくつか覚えた。そして、覚えたら直ちに使うようにしている。しばしば馬鹿げた間違いを犯すが、皆は非常に礼儀正しい故か、あるいは私を恐れてか、決して笑ったりしない。今日、私は一人の少女に「本を持ってきてください」と日本語で話しかけてみた。彼女は、躊躇しつつも、立ち上がり、本を持たずに私のほうへゆっくりと近づいてきた。私はその少女が自国語を理解できないのか、私の言い方が間違っているのか知りたくて、昼食時のテーブルで、もう一度同じことを言ってみた。すると、少女たちは心から笑って、私に教えてくれた。私が「本」のつもりで発した言葉は、「あなた自身の半分」という意味の日本語だったのである。そのかわいそうな少女がどれほど当惑したかは想像に難くない。

長母音と短母音の発音の違いは大きな意味の違いを生む。昨日、私は一人の少女に小さな「儲け」をストーブにくべるように指示した。日本語の儲けと薪の違いは、“a”の発音の違いである。愛らしいその少女は、私がしてほしかったことを行い、それから控えめに小枝を私に差し出して正しい言葉を教えてくれた。

私は1時まで教え、食事をする。3時には私の先生がやってくる。日本語の勉強は5時の祈禱会に間に合うように時間通りに終わる。軽い夕食の後、9時まで祈禱か英語の会議が続く。その後、勉強をするために2階へ駆け上がる。

私が手紙を記すペン運びは、私自身と同じように慌しくはない

だろうか。まだまだ沢山書きたいことがあるが、次回にとっておこう。ウィリー・ミーンズにも手紙を送りたいが、今回は無理である。

さようなら。皆さんに愛を込めて。とりわけ、アクロンの友たちに。皆さんが私のために祈るのを決して忘れないことを願う。皆さんの祈りは海を隔てた私たちにどれだけ多くの力を与えているかを忘れないでほしい。

可愛い子どもたちに私からの抱擁とキスを送る。

おばより

Yokohama, Japan
November 17th, 1876

親愛なるウィリーへ

今回はあなたが私からの手紙を受け取る番で、たくさん話したいことがある。大海原を横断した私の旅については、エラおぼさんが後日話してくれるだろう。それは決して楽しい話ではないと確信するはずである。しかし今は、あなたにぜひ見せてあげたいと望むようなものを常に目にしている。なかには、あなたのような若い少年の目には触れさせたくない悲しい光景も多々あるのだが。

先ず初めに、私の学校の校舎について話そう。それは小さな四角い建物で、タイルで覆われている。フェンスは真直ぐに立てられてワイヤーで束ねられた竹の枝で作られている。部屋は二重の壁があり、内側の壁はガラスのドアで構成され、外側の壁は板でできている。両方とも横にスライドさせることができるので、すべてを開け放つと屋外にいる気分である。日本の家屋や店舗は皆同じような造りで、店は常に正面が開け放たれている。日本人の住居は、ドアがガラスではなく、白い紙でできている。

日本の家屋に入ってあなたがまず躓くにちがいないのは、戸口の上り段のあたりに散乱する履物の山である。その履物は二枚の板切れの上にもう一枚の板切れを載せたまったく奇妙なもので、煉瓦作りの家の土台のように見える。彼らはそれを履いてカタカタ大きな音を立てながら、道を重々しく歩く。この履物は、親指とその他の指の間に紐を通わせることにより、しっかり留められている。靴下を着用する人は、白か黒の布製のものを履く。それは乳児用のソックスのような形をしており、親指の部分が分かれている。

少年も少女も前面が開いているスカートのようなものをはいていて、腰の辺りでしっかりと留められ、体に巻きつけられている。

このスカートと合わせて、上半身は非常にゆったりした袖の衣服を着用している。これが彼らの身に着けているものすべてである。帽子の類は、男女ともに被っているのを見たことがない。クーリー（身分の低い労働者）の中には、肌にフィットする非常に細身のパンツとその上にソックスをはいている者もいる。彼らの服装は、この寒さの中では、より快適に見える。

子どもたちは学校に来ると、私の机に近づき、膝を折り曲げて体を乗せると、顔が床に届くほど深くお辞儀をする。授業中、何か質問をする際には、小さな手を前で交差させ、低く頭を下げて礼をする。男性が常にお辞儀をしながら雑談しているのを見るのは面白いものである。

11月18日、土曜日、午後。日本に着いて初めて地震を体験した。家は前後に揺れていたにもかかわらず、皆によると、これは軽微なもので、間もなく、また揺れが来るだろうとのことだったので、私は一晩中震えていた。ここ日本は頻繁に地震があるので、いつか、この小さな島国は消滅してしまうのではないだろうか。

ミセス・バラによると、昨年の春、シャンデリアのランプの一つが揺れ落ちて壊れ、額縁の絵は落下し、食器類は粉々になったそうである。しかしながら、ドクター・ヘボンが17年前に日本に来て以来、重大な災害は発生していない。地震による揺れで家屋は傷み、雨漏りがするようになるが、風による家屋へのダメージのほうが、地震よりはるかに大きい。なぜならば、日本には台風やサイクロンなど、あらゆる種類の恐ろしいものが襲来するからである。

先日、日本の家庭を訪問した。夕刻だったので、紙のドアは閉じられていた。ノックをする代わりに、外に立って呼びかけた。奇妙な小さい家で、こぎれいなマットが敷かれた一間のみである。

（言い忘れていたが、私の教室はクッション性のある床にわら製のマットが敷かれている。）家具はほとんどなく、真ん中に数個の炭が乗せられた小さな灰の箱が一隅に置かれているくらいである。これが日本人の所有しているストーブであり、火鉢（*Hibachi* 火

の箱)と呼んでいる。

人々はひざを折り曲げて踵の上に座り、マットの上に寝る。ゆえに、彼らは椅子に座ると非常に居心地の悪そうな動きをする。

そろそろ学校へ行って、夕食の時間までオルガンの練習をしなければならぬ。いくらでも話したいことがあるが、少しは次回に残しておこう。

さようなら、愛しい坊や。ウォルター、メアリー、そして赤ちゃんへ愛を。

お婆のベレより

Yokohama, Japan

November 17th, 1876

親愛なるマティ姉へ

昨晚、些細な遺憾に思うことをあなたに綴っていると、それを記すや否や突然地震に襲われ、私の良心も少々揺さぶられてしまい、気に触る前半部分を直ちに破ってストーブに投げ入れてしまった。さて今、後半の感情むき出しの表現につながるような新たな書き出しができるか試みてみよう。

今は勉強するべき時間であることは承知しているが、どうしてもそのような気分にはなれない。昨夜は熟睡できず、午後は訪問に費やされた。ミスター・バラは、イングランドの YMCA から若者への祈りのために日本の YMCA は一致団結するようにとの要請のメッセージを受け取った。よって、私たちは 5 時からの祈禱会に出席したいと望んだ。ドクター・ブラウン宅から出てきた時、かなり急がなければならないことに気がついた。ミセス・ブラウンの乗る人力車の車夫が提灯に火を点すのに手間取っていたため、彼女は私の人力車を先行させることにし、車夫に私を YMCA に送り届けるように指示して、すぐに後から行くと話した。私の車夫は「はい、はい(*hi, hi!*)」と返事をしたが、彼らは理解していようがないが、いつもそう言うのである。そして「急いで!」という意味の日本語である「ジギ、ジギ(*jiggy jiggy*)」と叫びながら、大急ぎでスタートした。

約 1 マイルほど走った後、まったく馴染みのない場所に至っており、奇妙であることに気づき始めた。しばらくして、車夫は立ち止まり、近くの集団にここはどこであるかと尋ねた。彼らは車夫が道を間違えていることを指摘したので、別の方向に走り始め、少し行っては、また別の集団に道を尋ねた。人だかりができ、大声で話し合っては私に何かを訴えかけるが、私はただ「わかりません」と彼らの言葉で言えるのみであった。

徐々に暗くなり、自分がどこにいるのか皆目見当がつかず、どうやって家に帰ればよいのかも分からなかった。もしかしたら、彼らはこの番号を知っているのではないかと思い、「39番(San jui ku ban)」と言ってみた。しかし、誰もが聞いたことがないという表情であった。ついに、少し英語が分かる人物が探し出され、何とか目的地を説明することに成功した。車夫はようやく正しい道筋を得たが、家に帰り着くまでにかなりの時間を要した。

私は疲れ、気分も落ち込んでいる。日本へ向かう古い蒸気船の中で、私は何度も転んだが、一度は右の手首を捻ってしまった。ミス・アンドリュウの上に覆いかぶさるように倒れこんでしまい、彼女を傷つけてしまったのではないかと非常に心配した。腰痛がますますひどくなったので、手首のことはあまり気にかけなかった。

数日前、ミセス・バラから、私の手首に異様なこぶがあることを指摘された。私は少し気にはしたが、また忘れてしまった。しかし、痛みが取れないので、今日の午前中にドクター・ヘボンを訪ねた。彼の診断によれば、靭帯を痛めているとのことである。回復するであろうが、手首が多少変形してしまうかもしれないそうだ。転倒によって肢体不自由者にならなかったのは感謝である。しかし、手首が変形していくのを想像するには耐えられない。腰は完治していないが、快方には向かっており、十分によくやっていると思う。

木曜日、夜。書きたいことが山ほどあり、毎週の経験から一冊の本を作ることができそうである。それらはすぐに昔の話となるだろう。私はものすごく忙しく、時にはかなり泣きたい気持ちになる。ほとんど勉強する時間がない。教師が来る前に教科書に目を通す時間さえほとんど持てない。教師がいる間も、ほとんどいつも訪問者に呼ばれて階下に行かなければならない。

日本語は実に厄介な言語である。ドクター・ヘボンは17年間ずっと学び続けているそうだが、私の教師の話では、未だ流暢にはしゃべれないようである。日本語は中国語以上に構造が難解との

ことである。日本人はすべてを逆に行う。後ろから読み、右側から書き始め、文章は前後が逆で、子どもたちは顎から縫う¹⁵、などなど。

日本語のアルファベットはわずか72文字であるが、それぞれが多くの形態を有している。また、それぞれが音節を成しているので、一つ一つ正確に発音する必要がある。私は今それらの違いを習得したと思ってはいるが、いつも新しい言葉に出会うとつかえてしまう。横浜は4文字である。それはすべてが奇妙な音である。アクセントが全くなく、句読点もない。音節が次から次へと抑揚なく口から飛び出してくる感じで、実に奇妙である。

私はかなりの数の文章をどうにかこうにか聞き覚えた。人力車に乗り、一人で買い物にも出かける。買い物をする時、言い値を支払うことは決して期待されていない。そんなことをするのは初心者である。沢山の美しいものが売られている。しかし、私はまだあまり無駄遣いをしないよう自分に課している。「日本」はすぐに消えてしまうわけではないのだから、少しずつ許される範囲で買い集めていくことにしよう。

昨日、額縁を作っている場所に行った。店は、以前にも書いたように、すべて扉が開け放たれている。店員は講壇のような一段高い場所に商品を広げ、踵の上に体を乗せて座っている。私はずかずかと入って行き、店員が立ち上がるのを待たずに、「バラさん、39番」と言った。なぜなら、彼らはいつも立ち上がる前に恭しくひれ伏すからである。彼は「はい、はい」と答えて、もう一度お辞儀をし、何か言い添えたが、その言葉は忘れてしまった。店員にここの住まいに来てほしいと頼みたかったのだが、日本語でなんと言ったらよいか分からなかった。私は英語で話しかけ、彼は日本語で応答した。しかし、お互いに言っていることが理解できなかったので、なんら会話の進展はなかった。ついに私はジェスチャーを用いて、ミスター・バラ宅の39番に来てほしいと伝えようとしていることを何とか理解してもらったが、ほとんど骨の折れる作業であった。その結果、今朝、彼はやって来た。

今ようやく、私は十分に落ち着きを取り戻し、安心して就寝できそうである。おやすみなさい。次回の手紙は、もっと心地よくて気品のある書きぶりを心掛けよう。私の文才がもっと養われていたならば、どんなに良かったかと思わずにはいられない。ここにはあまりに多くの物珍しいものが存在する。私はそれらをあなたに実際に見せたい気持ちでいっぱいである。

思い出したついでに書くが、一枚につき 2 セントを支払うと、洗濯物を丁寧かつ綺麗に仕上げてもらえる。ミセス・ヘボンが訓練した一人の女性がこの施設の責任を負っている。作業のすべては男性が行っているのだが。

私は明日東京に行き、土曜日の夜まで滞在する予定である。サンフランシスコへの蒸気船は日曜日の午前中に出航するので、家族宛の手紙は今回書くことができない。皆さんによろしく。私に手紙を書くことと私のために祈ることをどうか忘れないでほしい。

Gama no, Ni shia ku Ni ju go Ban

December 28th, 1876

親愛なるマティ姉へ

驚かないでほしい。ここは単に訪問しているだけであって、返信にその外国語のアドレスを記載する必要はないのである。見ての通り、それはひどい名称である。しかし、意外にもすぐに慣れてしまうもので、日本人ほど正確ではないにしても、かなりすらすらと言えるようになる。外国人が現地の人と同じように流暢に話すのは不可能であろう。東京在住のミスター・グリーンが私たちのミッションでは最も日本語が上手く、彼のいとこで横浜在住のグリーン夫妻が、日本人によれば、日本中で最も日本語が上手い外国人だそうだ。

ミセス・グリーンを知っていたらと思う。彼女は実に美しい。彼女は同じ背格好の4人の子どもの母親で、最年長はわずか6歳である。そして、この手紙があなたのもとに届く前に、もう一人誕生する予定である。彼女は明るく朗らかで、常に助けの手を差し伸べようとしている。彼女の歌や演奏はすばらしく、2マイル近くも離れたところからやって来て私たちのクリスマスツリーを祝うために演奏してくれた。私が日本に到着して以来、私の心を完全に虜にした人物は、親愛なる年長のドクター・ヘボンを除いては、これまで一人もいなかった。グリーン夫妻は A. B. C. F. M. (American Board of Commissioners for Foreign Missions 会衆派教会) の所属である。ミスター・グリーンは翻訳委員会のメンバーである。しかし、ミセス・グリーンは、私にとって、ミセス・バラの10倍もの助けをしてくれる人物である。

私たちがクリスマスにどのようなことをしたか知りたいであろう。私はサンタクロースがあなたたちに何を持ってきてくれたかをとても知りたい。クリスマスの前に手紙が届くことを期待している。故郷からの便りは楽しさを大いに増加させるに違いない。だが、翌日東京に発たなければならぬ時に至っても、手紙は来

なかった。

今年是新来者であったので、学校のクリスマスツリーに関して、私は多くのことを期待されていなかったが、バラ夫妻を促すことができなかったので、私自身で取り組まざるを得なかった。年長の少年たちに手伝ってもらい、チャペルを整えた。少年たちは郊外から常緑樹の枝を取ってきた。私は行商人から赤いベリーと白いカメラアを購入した。そして一緒に水曜日まで作業を続けた。

少年たちは天使のようなよい子たちばかりである。母国アメリカの同年代の少年であったならば、騒音や質問を浴びせて、私を半狂乱に陥れていたに違いない。この少年たちは全員正座をし、私がクリスマスリースを作成するのを静かに観察していた。それから、次々にうなずいて枝を取り上げ、作業に取り掛かった。ミスター・バラがしばらくしてやって来た。彼にも手伝ってほしかったのだが、何もしようとはしなかった。ミスター・バラにはお引取りを願い、少年たちの助けのみで、すべてのことをやり遂げた。少年たちは皆センスがよく、必要とするのはちょっとしたヒントのみである。常緑樹の枝や蔓はとても美しく、簡素で小さなチャペルは魅惑的であった。

生徒は自分たちでツリーのほとんどすべての飾り付けを行い、私は最も適した飾り方をただ助言するだけであった。彼らはとても思慮深く、穏やかで人を引きつける何かをもっている。彼らも生きている人間であるから、感情があり、それを隠しているであろうが、彼らは接していて非常に気持ちが良い。私が何かを必要としている時、ほとんど間を置くことなく、それらが手渡される。彼らは私をまったく見ていないようだが、私の目の前の紐がなくなると、追加の紐が直ちに私の膝の上に乗せられる。そして、すべてが丁寧な態度でなされ、それはあたかも、彼らが私を好きで、私のために働くことを喜んでいるようである。

年長の少年のほとんどが、私のために何かをツリーに飾ってくれた。額に入った小さな可愛い絵や美しい和紙の箱に入った本物のように動く亀の人形。そして、何より魅力的だったのは、愛ら

しい小さな陶器の花瓶に生けられた開花直前の待雪草であった。それらはどれも美しく、異教の国の少年たちからの繊細な贈り物に思えた。

私の生徒の一人は、日本の漆細工が施された見事な文机、そして、山盛りのオレンジをプレゼントしてくれた。このオレンジをあなたに送ることができたらどんなに良いだろう。美しい竹かごに盛られたオレンジと緑のつる草、それを入れた大きな箱は半ブッシュ¹⁶の重さは持ちこたえられる大きさである。この荷の隣には卵もあった。それは予期せぬことで、思いやりを持って覚えていてくれたことにとっても幸せを感じた。

ミセス・ヘボンは、鼈甲の櫛（ここ日本では7、8ドルの価値がある）、ミセス・バラはギリシャ神話に登場する美少女プシケの胸像、ミスター・バラは二対の細長いガラス製の花瓶を贈ってくれた。そして、ヴィック社のヒヤシンスの球根が郵便で届いた。アメリカの思いやりのある友人の誰かが送ってくれたものである。こんなに嬉しいことはない。おそらくアシュタブラに住むミセス・パーソンズだと思うが、送り主に心から感謝したい。

ミセス・ヘボンはクリスマス・ディナーを用意してくれた。東京からインブリー夫妻とミスター・グリーンが訪れ、ドクター・エルドリッジ¹⁷夫妻と母親もやって来た。ドクター・エルドリッジはワウケシャに住むウィリー（マーシュ）をよく知っていると話し、夫人もウィリーと親交があると言った。また、ドクター・エルドリッジの母親とは、私が昨年ワウケシャに滞在した際に会ったことがある。

総勢12名が集まり、言葉遊びなどをして楽しい時間を過ごした。私はそれまでの長い時間を自室で過ごしていたので、牢屋から開放されたような気分になり、活発に振舞った。私はヘボン宅に終日滞在し、母親を慕う子どものようにミセス・ヘボンのそばにいた。ミセス・ヘボンの息子の妻は、均整の取れた小柄な体格で、午後に来て、一緒にテーブルの飾り付けをした。皆に見せられたらと思う。テーブルクロスの上に緑色の葉っぱと赤いベリ

一を置き、それぞれの皿の横には椿を配した。今度帰国した時にどんな風にしたかお見せしよう。最後にあなたに会って以来、私は多くのことを学んでいる。

ミス・ヤングマンが先週やって来て、私がいに行かなかったことを、まるで盗みを犯した罪人のごとく罵った。私は途方もなく忙しかったと説明したのだが、私が望まないのであれば、もう二度と来ないと優しさのかけらもない口調で彼女は言い放った。しかし、最終的には、26日にミセス・ツルー¹⁸のツリーを見てから、ミス・ヤングマンのところにしばらく滞在する約束をした。

そのようなわけで、私はインブリー夫妻と一緒に昼の列車に乗った。もし私がミス・ヤングマン宅へ直行したならば、遅い時間になるから、夕食は取れないであろうとミセス・インブリーは言うので、彼女の家を同行した。インブリー宅はミス・ヤングマン宅の隣にあるため、人力車を家の前ではなく、少し先に止めるように車夫に頼むのに苦労した。夕食後しばらくしてミス・ヤングマン宅に向かうと、彼女はちょうど人力車で外出するところだったが、私に一瞥もくれようとはしなかった。

ミセス・ツルーのところへ行こうとしているのは分かっていたので、インブリー家の使用人に後から必要なものを届けてもらうことにして、私もミセス・ツルー宅に向かった。ミス・ヤングマンの人力車と私の人力車は競争するように走り、抜きつ抜かれつのレースを繰り広げたが、彼女は全く私に気づかないふりをしていた。ミセス・ツルー宅の門の前に到着した時、ミス・ヤングマンはミセス・インブリーに話しかけはしたものの、私のことは完全に無視した。かなり時間がたってから、「ミス・マーシュ、ごきげんいかが？」と声をかけてきた。ミセス・インブリーは「彼女のいつものやり方よ。あなたが私と一緒に来たことに腹を立てているのよ」と教えてくれた。日本にいる仲間の誰一人としてミス・ヤングマンを好ましいと思う人はいないだろうが、私は好きになりたい。なぜなら、彼女はサラの友達だから。

ミセス・ヘボンもしばらくしてツリーを見にやって来たが、彼

女のところへ滞在するようにと勧められるのではないかと私は冷や冷やした。だが、ミセス・ヘボンは親切にもその夜私をミス・ヤングマン宅へ送り届け、荷物もそのままにしてくれた。今回の体験から、ミス・ヤングマンを訪問するのはしばらく差し控えた気分である。

1月5日、金曜日。先週は恐ろしく消耗してしまった。ミセス・ヘボンは東京のミス・ヤングマンのところにいるミス・ギュリックのもとへ使いを出した。ミス・ギュリックがこちらに来て、私と一緒に休暇を過ごすためである。私たちは実に楽しい時間を持った。ミス・ギュリックは心優しく、純粋な女性で、私がこれまで知る中で最も燃え立つような赤毛の持ち主である。彼女はサンドイッチ諸島¹⁹で生まれ、ギュリック宣教師一家に属しており、彼女もつい最近宣教活動に加わった。

ミス・ギュリックが到着すると、ミセス・ヘボンは「さあ、お嬢さんたち、何でも好きなことをしてちょうだい。私のたんすの引き出しを漁るもよし、他のことも好きなだけおやりなさい」と言ってくれた。実際、ミセス・ヘボンは可愛らしいものを沢山持っていたので、たんすを覗くことができるのは、かなりの楽しみである。

元日は誰の訪問も受けたくなかったので、ミセス・ヘボンは私たちを二階にとどまっているように配慮してくれた。私たちはおしゃべりに興じて笑い声を立ててしまったので、ミセス・ヘボンから「人に会いたくなくて隠れているのだから、静かにしていなくてはだめですよ」と注意される始末であった。そして、ついには彼女の可愛らしいポニーのトラップ馬車を使って外出することを許してくれた。

日本の馬はとても奇妙な毛深い小さな生き物である。馬はかなり珍しく、ミセス・ヘボンの馬車は寄贈されたものである。馬車には常に従者がおり、彼らは別当 (*Betto*) と呼ばれている。別当は馬の横を走る。彼らの走りは軽々としており、ポニーとほぼ同じ速さで遠くまで移動できる。馬車はすべてちっぽけで、まるで犬

が引く小さなカートのようなものである。

私たちは、ミシシッピ湾²⁰まで田舎道の遠出を大いに楽しんだ。二つの寺院と三つの神社を見物した。別当は軽々と走るの、彼と遊ぶのは愉快に違いないと思った。そこで別当を馬車に乗せ、私たちが下車してポニーと一緒に走った。ミス・ギュリックは日本語を試した。適切なジェスチャーをしながら、「別当、どうぞ、ここに座って御してください。わたくしどもは歩きます」と言った。「どうぞ」は“please”で、「わたくしども」は“we”の意味である。この「わたくしども」という言葉は、どんな場合にでも使えることがわかっている。別当は穏やかに笑い、恭しくお辞儀をし、私たちが望んだようにしてくれた。「私」と言うかわりに、いつも「わたくしども」という言葉を使うことをぜひ想像してほしい。

昨晚、アメリカン・ミッション・ホームのキャンディ・ブル²¹に行った。深夜まで帰宅できず、今日は頭痛に悩まされている。ミス・ギュリックは昨日帰宅し、私もバラ宅に戻った。と言うのは、ヘボン宅では勉強することも手紙を書くこともできないからである。おしゃべりに忙しすぎて。ヘボン宅は寛げる心地よさがある。ミセス・ヘボンは私たちをよく叱り、もし私がお付き合いと一緒に歌うことを拒んだり、ばかげたことをしてしまったならば、ひどく怒られそうではあるが、誰もがヘボン宅で心地よい休息を味わっている。

今夜もまた外出が予定されている。昨夜も夕食に招かれたので、二日続きである。今週はほぼ毎日、夕食とお茶のために一日 2 回外出していることになる。

おととい、また恐ろしい地震があった。家はたいそう揺れ、ドアが閉まらなくなってしまった。しかし、私は以前ほどには恐怖を感じなくなった。常に部屋着をベッドの上に、履物をベッドの横に置いている。そうしておけば、夜地震が発生して家が潰れそうになっても、すぐに屋外に逃げ出せるからである。ほかの人たちも、私と同様にしている。だが、最初に体験した恐怖感

は、皆弱まっている。

坊やたちにも手紙を書かなければならないと思ってはいるのだが、あなたに長々と綴ってしまった。きっと読み疲れたことであろう。もう筆が止まらない感じである。赤ちゃんの写真をありがとう。とてもうれしい。

さようなら、親愛なるお姉さま。あなたのご両親と家族にたくさんのお愛を。私はたくさんのお愛を手紙に記すので、2通の手紙を同じ郵便で出すのはあまり価値がないであろう。しかし、アクロンとタルメイジに宛てては交互に書くつもりである。

あなたのノースフィールド行きを妨げることが何も起こりませんように。

親愛なるウォルターとウィリーへ

どれ程二人からの手紙を楽しみにしているか伝えたい。あなたたちが尋ねる以前にあなたたちの知りたいことにはすべて答えていると思う。私たちのクリスマスについてはあなたたちのお母さんへの手紙に記した。そちらのクリスマスについてもぜひ知りたい。ウィリー、可愛い葉をありがとう。

どんなに小さな日本の子どもたちのことを思い遣ったとしても、私の故郷の少年たちを忘れることなど決してない。日本の少年たちはとてもかわいらしい。教会では、賛美歌集からその日の賛美歌を私のために見つけ出すことがとても良いことであると彼らは思っている。今では、自分で見つけることができるようになってはいるが、ある日、私が自分で見つけ出す姿を目撃すると、彼らはとてもがっかりした様子だったので、以来、自分では探さないようにしている。

彼らはいつも私に新しい言葉を教えようとする。物を取り上げ、「これは (*Ko'ra wa*) 何々です」と言う。「これは」は “This is” という意味である。彼らはアメリカの一部の少年たちよりもはるかに礼儀正しい。なぜならば、彼らは他人の間違えを決して笑わないからである。

日曜午後の私たちの学校の様子をあなたたちが覗くことができたならば、びっくりして目を丸くするに違いない。それは貧しい子どもたちのための学校である。ほとんどすべての子どもが赤ちゃんを背中に忍ばせて上着を羽織っている。小さな頭があちこち動くのが見えるのみである。その頭のいくつかは傷でおおわれている。ほぼ全員がぼろをまとい、汚い。彼らを見るのは、真に心の痛むことである。彼らは好んで私に近寄り、不思議そうな表情で私の顔をじっと見つめる。哀れな幼い者たちよ。彼らは真実の神について聞いたことが全くなく、主イエスは彼らのような幼子を愛しているのだと指導の若者たちから聞かされた時、彼らは非常に驚いていた。私たちは、まず初めに、賛美歌の「主我を愛す」を日本語で歌うことを教える。彼らが私たちを見ながら、まねて口を開け、歌おうとする姿をあなたたちに見せたい気持ちでいっぱいである。

暗くなってきたので、私はお茶のために外出しなければならぬ。あなたたちのお母さんに宛てた手紙も関心があるならば読んでも構わない。あなたたちからの手紙をいつも心待ちにしているので、毎月手紙を書くことを忘れないように。メアリーと赤ちゃんにたくさんの愛を。

訳者注

【第1部】

- 1 東京一致神学校一期生で、後に牧師となった太田留助と考えられる。
- 2 鶴徳次郎か鶴儀三郎と考えられる。
- 3 前号 (Vol. II-4) の「横浜の少年たち」(14 ページ)の中で「カドヤについては後日話す」と予告しているので、ミセス・バラの書簡とみなして間違いない。
- 4 後に横浜第一長老公会オルガニストとなった角谷省吾と考えられる。
- 5 ヴィクトリア朝イギリスの福音派児童文学作家ファヴェル・リー・モーティーマー (Favell Lee Mortimer) が著した *Peep of the day, or, A series of the earliest religious instruction the infant mind is capable of receiving*. 『夜明けに一幼い子どもにも理解できる最初の信仰の手引き』 (1836)
- 6 William Elliot Griffis による “Travelling in Japan” (*Children’s Work for Children* Vol. I -11, pp. 168-170, November 1876) の人力車に関する記述。
- 7 旧約聖書 ダニエル書 12 章 3 節
- 8 6月号 (Vol. II-6) の「横浜の少女たち」(18 ページ)の中で「日本の家庭を訪問した時のことを次回お話したい」と述べているので、ミセス・バラの書簡とみなして間違いない。
- 9 巻頭の挿絵 vi 参照。
- 10 本来は塩であるが、ミセス・バラには土に見えたようである。
- 11 宣教師トーマス・ウィン (Thomas Winn) の妻イライザー (Eliza Winn)。1877(明治10)年来日。医学と看護学を修めている。夫とともに北陸伝道に尽力した。
- 12 牧野ヨシと考えられる。彼女は1874(明治7)年に受洗し、ドクター・ヘボン宅に30年間住み込んで働いた。ミセス・ヘボンの秘書役・通訳として国内伝道旅行に同行し、塾での代講や説教も行った。

【第2部】

- 13 旧約聖書 詩篇 116 章 12 節
- 14 ケイト・ヤングマン (Kate M. Youngman) は 1873(明治 6)年、米国長老教会女性海外伝道協会派遣の女性宣教師として来日。翌年築地新栄町に女子寄宿学校を開校した。
- 15 裁縫の際、針と糸を顎の高さ位まで引き上げて布に刺す仕草を指摘しているのであろうか。
- 16 乾量の単位 1 ブッシュェル (bushel) は約 35 リットル
- 17 エルドリッジ(Stuart Eldridge)は 1843 年アメリカに生れ、維新後間もない 1871(明治 4)年 28 歳で来日し、翌 5 年北海道に渡り開拓事業の一環として造られた開拓使函館医学校の開校と同時に同校の教授となる。当時は医学校教授としての人材が不足していたためであろうが、基礎医学・臨床医学の全部の科目を一人で講義していたとのことである。また、その頃開設された函館病院で一般患者の治療にあたっただけでなく積極的に病理解剖や司法解剖も行い、1874(明治 7)年ロシア人サルトフの病理解剖、ドイツ人ハーバーの死体検案を行った記録が残っている。函館での任期満了後横浜に移り、山下町の居留地に診療所を開業し、自宅を山手町 167 番地に定めて日本での本格的な医療に着手した。その間、神奈川県衛生顧問、十全医(病)院(横浜市立大学医学部附属病院の前身) 外科、山手一般病院(現在診療所となっている) 院長、アメリカ領事館衛生顧問、慈恵成医会副会長などの要職を歴任し、明治中期における横浜の医療に貢献した彼の功績は高く評価されている。(横浜市立大学医学部医学科同窓会倶進会ホームページより)
- 18 メアリー・ツルー (Mary True) 。1874(明治 7)年に亡夫の志を継いで宣教師として来日。女子学院の前身である原女学校、新栄女学校、桜井女学校などの女子教育の発展に尽力した。
- 19 現在のハワイ諸島
- 20 根岸湾のこと。幕末にペリー艦隊が名づけた。
- 21 Candy pull : 集まった人々でキャンディの塊を引っ張って長く伸ばし、細い棒状のキャンディを作る。

明治学院歴史資料館資料集 第10集①

2015年3月31日 発行

編集代表 長谷川 一
発行者 小暮 修也
発行所 明治学院歴史資料館
東京都港区白金台 1-2-37
電話 03-5421-5170
印刷所 株式会社 野毛印刷社
神奈川県横浜市南区新川町 1-2